災害メモリアルアクションKOBE

ACTION 2024

伝える大震災、つながる防災

Disaster Memorial Action in KOBE

目　次

開会のあいさつ…… 1

活動発表

兵庫県立舞子高等学校…… 2

滋賀県立彦根東高等学校…… 5

兵庫県立尼崎小田高等学校…… 9

TEAM-3A…… 12

国立明石工業高等専門学校
D-PRO135°（明石高専防災団）開発チーム…… 14

国立明石工業高等専門学校
D-PRO135°（明石高専防災団）地域連携チーム…… 17

神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ…… 19

神戸学院大学 クローズアップ社会研究会…… 22

関西大学 社会安全学部 奥村研究室…… 25

兵庫県立大学 防災リーダー教育プログラムチーム…… 28

パネルディスカッション…… 31

グラフィックファシリテーション記録…… 43

閉会のあいさつ…… 45

災害メモリアルアクション KOBE2024 のことば…… 46

プログラム…… 47

委員・学生名簿…… 49

発表風景等…… 51

災害メモリアルアクション KOBE
ACTION2024

「KOBE のことば」

日　時：2024年１月６日
　　開会 午前10時00分

開会のあいさつ

牧紀男委員長

○牧企画委員会委員長

皆さん、おはようございます。

一番初めに黙禱を捧げさせていただきましたが、１月１日に能登半島で地震がございまして、現在も大変な状況が続いているという状況にございます。

そして、この「災害メモリアルアクション KOBE」ですけど、私たちが目指しているのは、震災を体験していない人が震災を体験していない人に伝えていくという、そういう仕組みをここで一緒に考えていきたいというふうに思います。

私、企画委員長をさせていただいてますけども、企画委員は私ぐらいの年ですので、50歳と、それから阪神・淡路大震災を経験された人たちが、この問いに対する答えを知っているのかっていう思いはあって、私たちは震災を経験してしまい、震災を経験していない人ではないので、この震災を経験していない人が震災の経験していない人に伝えるっていうことについて、私たちが思っていることが果たして正しいのかどうかっていうことはよく分からないですので、震災を経験していない、震災後に生まれた皆さんと一緒に、どうやったら伝えられるのかということについて、一緒に考えていきたい、そういうふうな思いでこの活動をやっています。

高校生・中学生の方々もここは多いですけど、大学で教えることって何かというと、分かってへんことをみんなと一緒に考える、ですから大学の先生に、これどうなんと聞かれて、今、卒論の最中ですけど、修論とか、そんなお前、答えが分かるようなことを研究するような場所ではない、みんなと一緒に分からへんから考えていく、そういうことをこの場でやっているということになります。

それで、この活動でございますけども、大変長い歴史を持ってございまして、第一期、「メモリアル・コンファレンス・イン神戸」ということを初めの10年間続けてまいりました。現在、能登で大変な災害の状況になってますけど、この災害からの復興、どうしたらいいのかということについて、いろんな人たちが考えてきたということになります。

その後、2006年から2015年は、「災害メモリアル KOBE」という活動を続けてまいりました。これはその災害を経験しない若い世代が増えてきた中で、その災害の経験をじゃあどうしたら伝えれられるのか、ですから大人が、災害を経験した人たちがその災害を経験していない人たちに、どうやったら伝えられるのかいうことを考えてまいりました。

その中で私たちが気づいたことは、いつも大人の経験ばっかり、その災害のこと聞かされるので、高校生でしょ、大人がどんな悩みを持ってるって知りませんよね。でもその悩みを聞かされて、いや分かりましたとか言って、それじゃ駄目だと。やはり若い方が、自分の経験を若い人に伝える。それから大人の経験を伝えるときも、直接伝えるのではなくて、その当時のお父さんと子供とか、当時の先生と子供とか、そういう対話を通じて伝えていくということを実行してできるんだということが大事だと分かってきたので、現在、「災害メモリアルアクション KOBE」ということで、アクションという言葉をつけました。これはどういうことかというと、やはり南海トラフ地震が近づいてくる中で、この間にも、大阪北部地震ですとか、今年になって能登半島地震とか、実際の災害がたくさん起きるようになりましたし、やはり南海トラフ地震というのも発生も近いですから、伝えるだけではなくて、それをどういう形で行動につなげていくのかということで、やっているということでございます。

来年でこの「災害メモリアルアクション KOBE」も最後ということで、企画委員会でどうやってこの成果を取りまとめようかという議論をしました。今日もいろいろお話を聞きますが、新聞であったり、ゲームであったり、ビデオであったり、いろんなものをつくってきたわけです、つくってって言ったら皆さんがつくられたわけですが、その中で議論の中でいや、これすごいなと思ったのは、ものをつくりましたが、人もつくってきたんだ、このメモリアルアクションは。皆さんみたいな、たくさんの若い方にこの場に来ていただいて、ここでこういうことを、半日ですけども考えていただくという、そういう人をつくるということも、この成果の１つではないかというふうに思います。

今日は、皆さんの活動を聞いて、もうすぐ１月17日で29年なりますが、阪神・淡路大震災、それから現在大変な状況にある、能登の被災地に思いを巡らして、どうすればそういうふうなことの苦しみというのを減らすことができるのかということについて、一緒に考えたいと思います。

それでは、本日よろしくお願いいたします。

兵庫県立
舞子高等学校

防災読本の工夫

・イラスト、写真を多用する
・高校生が興味を持ち、読みたいと思う紙面

舞子高校チーム

今年度のチーム目標

『 災害の教訓を活かして活動をしよう 』

昨年度、先生方から被災体験を聞くことで阪神・淡路大震災の教訓を知ることができた。今年度は、その教訓から得たものを未災者へ広め、先生方の被災体験を活かせるような活動がしたいと考えた。そのため、今年度は今まで先輩方が続けられてきた先生方への被災体験インタビューと共に、防災読本の作成を行いたいと思い、この目標を掲げた。

舞子高校チームの紹介

私たちは1年生17人、2年生4人、3年生4人の計25人で活動している。

主な活動内容は舞子高校の先生へのインタビュー、防災読本の作成を行っている。今年度は、1年生の人数が大幅に増えたことや防災読本の作成という新しい活動が始まったため、防災読本を作成する班と、インタビューをする班に分かれて活動している。

防災読本班とインタビュー班に分かれて活動すると、お互いの班の活動状況がわからない。その解決策として、月に1～2回全員で集まり、それぞれの班の活動状況を共有している。

防災読本班

○ 防災読本作成の目的

いざという時、自分の命・家族の命を守ることができるようにするため。災害への備えや、発災時に役立つ情報を提供するため。

○ 内容

防災読本は3部構成で、項目は以下のとおりである。
「事前の備え編」：マイ避難カード、学校周辺のハザードマップ、学校の備蓄品、防災グッズ一覧
「災害発生時編」：シェイクアウト、応急処置
「避難所編」：非常用トイレ・紙食器の作り方　など

「学校の備蓄品」の項目を作成した理由は、先生だけではなく、舞子高校の生徒にも備蓄倉庫の場所や、どのような備蓄品があるかを把握してほしいからである。舞子高校に現在備蓄されているものを紹介し、備蓄倉庫の状態・場所について知ってもらうために、写真も掲載した。

インタビュー班

○ インタビューの動機

舞子高校の先生に被災体験を聞いて冊子や年表にまとめ、伝えることによって自分事として捉えてもらうために始めた。

○ 内容

新しく着任した先生方に「当時の年齢」「住んでいた場所」「当時のまち・家・先生の心の様子」「先生の心の支えになったもの・こと」「震災後先生の中で変わったこと」「生徒・当時の自分へのメッセージ」この6つの項目をインタビューしている。それらを冊子や年表にまとめ、今後入学する生徒が見てもわかるように形にまとめる。

来年度の活動内容

防災読本班

避難所運営マニュアルのページを追加し、災害時、舞子高校生が、避難所運営のお手伝いができることを目指す。また、読者に防災読本に関するアンケート調査を行い、「読みたいと思える」ものにしていきたいと思う。

インタビュー班

引き続き、舞子高校に着任された先生方にインタビューを行い、冊子や年表作成に取り組む。

作成した冊子や年表があまり知られていないので、多くの人に先生の被災体験について触れてもらえる機会を作りたい。

○兵庫県立舞子高等学校１　皆さん、こんにちは。兵庫県立舞子高等学校です。これから舞子高校チームの発表を始めます。よろしくお願いします。

初めに、舞子高校チームの目標、次に今年度の活動内容の報告、最後に来年度の活動の予定についてお話しします。

○兵庫県立舞子高等学校２　舞子高校チームについての紹介をします。主な活動内容は、先生のインタビュー、防災読本の作成で、それぞれの班に分かれて活動をしています。

○兵庫県立舞子高等学校１　今年度の目標についてお話します。今年度の目標は、「災害の教訓を活かして活動しよう」です。私たちは、先生方から被災体験を聞くことで、阪神・淡路大震災の教訓を知ることができました。今年度はその教訓から得たものを未災者へ広める活動を行いたいと考えました。そのため、今年度は今まで先輩方が続けられてきた先生方の被災体験インタビューを継続しつつ、新たに防災読本の作成を行いたいと思い、この目標を掲げました。

○兵庫県立舞子高等学校２　それでは、今年１年間の活動についてお話します。

私たち、防災読本班が行ったことは、主に防災読本の作成及び改良です。防災読本とは、舞子高校生が災害時に自分や大切な人の命を守る、広めることができるように作った冊子になります。

また、舞子高校が避難所になったときに、生徒が避難所運営のお手伝いができるようになることも目指しています。

防災読本はイラストなどを多用し、高校生が興味を持てる、読みたいと思える冊子紙面にしました。

防災読本の各ページについてご紹介します。

会場にてお配りした読本の３ページ目を開いてください。ここには防災ジュニアリーダーが作成したマイ避難カードを、防災読本に合わせて改良したものを掲載しています。

６から９ページ目には、学校の備蓄品に関する内容を掲載しています。これらのページは、生活には必要ですが、学校には備蓄されていないものがあるということを知らせるために掲載し、事前の準備につなげてもらいたいという思いを込めています。

次のページでは、内容のページになりますが、事前の準備に必要なものをまとめました。

○兵庫県立舞子高等学校１　こちらはシェイクアウトについての注意記事になります。地震発生時に命を守れるようにするために作成しました。

こちらのページは応急処置についてのページになります。腕や足を怪我した際の止血方法、熱中症・脱水症状になった場合の応急処置をまとめました。災害時には、すぐに医療を受けられないこともあるため、自分たちで簡単な応急処置ができるように、このページを作りました。

こちらは、避難所生活を想定して、ダンボールを敷いて寝るという実験のコラムになります。災害時も少し工夫するだけで、生活環境が改善できるということを報せるために作成しました。

こちらのページにはトイレに関する内容を掲載しています。前半では、災害時にトイレが使用できなくなることを伝え、携帯トイレの備蓄の必要性を知らせるために作成しています。後半では舞子高校のトイレについてまとめ、避難所運営の際に役立ててもらえるようにしました。

最後のページには紙食器について掲載しています。２種類の紙食器の作り方、使ってみた感想・評価・使用例を記載しています。

○兵庫県立舞子高等学校３　私たちインタビュー班が行ったことは、主にインタビュー冊子の改善、新着任の先生への震災体験のインタビューと、冊子への掲載、年表作成です。

１つ目は新たにインタビュー用紙の作成をしたことです。以前までのインタビュー用紙は、見出しの形が規則的過ぎて冷たい印象を与えてしまったことから、文字のポイントを変え、レイアウトのような形にすることで、温かく見やすい用紙になるのではないかと思い、このような形へと変更しました。

これが今年、今年度作ったインタビュー冊子です。冊子の左には当時の年齢、住んでいた場所、当時の町、家、先生の心の様子、先生の心の支えになったもの・こと、震災後先生の中で変わったこと、質問事項があ

らかじめ印刷されています。

用紙の右上には生徒に向けたメッセージを書く欄とフリースペースがあって、インタビューした生徒が、先生の話を聞いて、心に響いたことなどを書けるようにしています。また、このインタビュー用紙は、インタビューする際のメモ用紙であると同時にそのまま冊子の１ページにもなる清書用紙としても使っています。

２つ目は、中間報告会のワークショップでは、インタビューの方法についてご意見をいただきました。以前までは大まかなインタビュー内容が決められてしまっていることから、テンプレートの内容だけを一問一答形式で聞きにいってしまっていたため、先生方の一番伝えたいことや言いたいことを聞きそびれてしまいました。そのため一問一答形式のまま単調なインタビューではなく、耳を傾けてみる、内容の中から一番知る、何度か繰り返し聞いてみることで思い出したり、今より深く考えることができるのではないかと考えました。

実際にこの用紙を使ってみた、使った感想をメンバーだった人に聞いてみました。ある人は以前に比べて抜群に動きがあって、温かみを感じたというふうに言いました。しかし、あらかじめ質問が決められてしまっていたため、質問内容がそれぞれ、それだけになってしまい、先生の言いたいことが本当にインタビューできているのかが気になったという意見もありました。

３つ目はインタビューを年表にまとめることです。毎年、先生へのインタビューは年表形式で模造紙にまとめています。４つの項目に分けており、１つ目は被災当時に何をしていたか、２つ目は、心の支えとなったもの、３つ目は災害を経験して自分の中で変わったこと、４つ目は私たちに伝えたいメッセージ・思いです。インタビューから得た情報を基にまとめ、年表に貼っていくことで、新たに気づくことも少なくありません。ある女性教諭の方は心の支えになったことは、自分の子供だと言っていました。しかし心の支えがあると同時に大きな不安にもつながったとおっしゃっていました。心の支えとは被災者の心を癒やすものとばかり思っていましたが、支えだけじゃなくて不安にもつながってしまうということを新たに学びました。

今回の目標の下、インタビューを通して、災害の教育・経験を学び、そのインタビューを冊子や年表にまとめ、そちらを見てもらって教訓を伝えるといった活動ができたのではないかと思います。

○兵庫県立舞子高等学校１　最後に、来年度の活動についてお話しします。

防災読本班では、先ほどの目標の下、活動してきましたが、生徒が避難所運営のお手伝いをできるようにするための内容が不足していました。そのため、防災読本班ではこれらの活動を予定しています。

まず、舞子高校の生徒にアンケートを行い、より高校生が読みたいと思える読本になるように紙面を改善します。

次に、インタビュー班の冊子の内容をまとめて防災読本に掲載します。

また、今年度目標としていた生徒向けの避難所運営マニュアルの掲載を、来年度実施しようと考えています。

○兵庫県立舞子高等学校３　インタビュー班では、中間報告会でいただいた意見を基に質問内容を改善し、これまで行ってきた先生方のインタビューを継続しようと考えています。

また、阪神・淡路大震災から28年という月日が流れた今、校内には震災当時にはまだ生まれていない先生、物心ついていない先生が増えてきているため、校内でのインタビュー活動が十分に行うことができた場合には、インタビューの対象を地域住民に広げようと考えています。

まだ案の段階なので、どのような人に聞くか、インタビューを受けてくれる相手はいるのかなど、まだまだ決めきれていませんが、震災を知らない私たちにとって、特別な学びになると考えています。

○兵庫県立舞子高等学校１　これで、舞子高校チームの発表を終わります。ご清聴ありがとうございました。

滋賀県立
彦根東高等学校

2023年の問題意識

①エネルギー問題
原発再稼働して大丈夫？
原発事故のその後は？
②弱者×避難
誰もとり残さず避難するには？

滋賀の高校生が「福島」について考える

＝福島から安全と安心を学ぶ＝

滋賀県立彦根東高等学校新聞部 「福島をつなぐ」取材班

災害メモリアルアクションKOBE報告会 2024.1.6

はじめに

東日本大震災から、「福島をつなぐ」を始めてから12年が経った。より伝わるように「福島」をより身近な問題へ

- 国の推進する原発再稼働に賛否の判断を下すには原発の今やエネルギー問題について知らなさすぎる
- みんなで逃げるための備えは？

原発再稼働

3月30日～4月1日に双葉町や大熊町など津波・原子力災害の被害の大きかった旧避難指示区域を中心に取材した。

カーボンニュートラルを目指すにはCO2を排出せず、経済的にも再エネより安定して発電できる原発はまだ必要（経産省・木野正登さん）

エネルギー政策を考えるときにはエネルギー安全保障・環境負荷・経済規制・安全性の3E+Sを軸に考えるべき（東京大学・開沼博さん）

何を大事にするか人によって違う

弱者×避難

障害や人によって困ることは違う。事前に情報を集め個別に避難計画を（防災介助士・冨樫正義さん）

トレーラーハウスでは被災時もほぼ普段通り生活できる。妊婦や精神疾患患者にも◎（株式会社ユーベスト・上田恭典さん）

個性に応じた選択肢が避難には必要

東京電力・経済産業省
廃炉を着実に進めるために

処理水放出について

エネルギー政策と福島の現在地 開沼博先生
原発再稼働へ一致は困難か

福島の現状

←彦根東高校526号

障がい者の避難
一人ひとりの不自由さに合わせて

←彦根東高校530号

甲賀市と防災協定結ぶ
コンテナホテルから始まる防災

まとめ

- 原発をどうするかは私達一人ひとりの問題。知ろう
- 個別の状態に応じた様々な対策・選択肢を
- 多様な情報発信が必要

○滋賀県立彦根東高等学校１　皆さん、こんにちは。滋賀県立彦根東高校新聞部の伊東大舞と

○滋賀県立彦根東高等学校２　木村胡春です。

○滋賀県立彦根東高等学校１　お願いします。

まず彦根東高校なんですけど、彦根城の濠の中にある学校で、今年で創立147年を迎えます。2026年には150周年となります。そんな彦根東高校の新聞部なんですけれども、モットーを「やりたいことは何でもやる」にして新聞作りを続けています。

今年は彦根城の世界遺産化や、居場所特集と題して不登校の生徒についても話題にしました。また、滋賀県版ダーツの旅なんていう楽しそうなこともしてみたり、いろいろできるというのが本校の新聞部の特徴です。

その中でも、私たちが過去12年間、ずっと続けてきた特集が一つあります。それは「福島をつなぐ」という特集です。

2011年の東日本大震災が発生してから約１か月後、福島県の相馬高校から相馬高校新聞第139号が届きました。当時新聞部員だった先輩は衝撃を受け、遠く離れた滋賀の地と福島をつなげたいという思いからこの特集が始まりました。

今年は、５月26日発行の第526号、10月16日発行の第530号、12月１日発行の第531号の３回に分けて、「福島をつなぐ」を掲載しました。

○滋賀県立彦根東高等学校２　５月26日に発行したものでは、エネルギー問題をテーマに取材を行いました。本校では自動販売機の値上げが立て続けに起こっています。日本では火力発電を主な発電方法としていることはご存知のことだと思います。この値上げは飲料を製造する工場を動かすための電気代が、原油や天然ガスなどのエネルギー価格の高騰によって高くなっているために起こったことでした。

そこで、電気代の高騰の解決方法の一つとして、日本では原子力発電所の再稼働を掲げています。原発稼働に賛成の人、反対の人がいる中で、本当に原発は再稼働すべきなのか、原発事故の被害や現在の状況、そこに関わる人、関わった人について正しく伝えるために、実際に３月30日から４月１日にかけて福島県を訪れ、双葉町、大熊町を中心に取材を行いました。

東京電力の今津さんと、経済産業省の木野さん、佐藤さんに、福島第一原子力発電所の現在とこれからについてお話を伺いました。木野さんは、カーボンニュートラルを目指す中で、二酸化炭素を出さない原発はなくてはならない存在だと話され、今津さんは、どんなエネルギーにもメリットとデメリットがあり、電力は組み合わせることが大切だと話されました。

また、ALPS 処理水を海洋放出する際の住民の方の反応について、木野さんは、以前は処理水の安全性について話していたが、今は風評被害への対策を話していると話されました。

積極的に情報を取りに来る人だけではなく、そうでない人たちに対しても、正しく認識してもらうために、答えていくことの必要性を話してくださいました。

また、原発によって大きな被害を受け、昨年の８月に一部避難指示解除がされた双葉町町役場の橋本さんにお話を伺いました。12年間も土地を離れたことで、双葉町以外の居住地での生活が安定し、町に戻らないと決めている元住民の方がほとんどだと話してくださいました。

復興の形として双葉町は除染が完了して初めてゼロからのスタートを切ることができる。何が正解かは分からないが、双葉町がなくならないことが復興だと思うと話してくださいました。双葉町の自然豊かなところがいとおしく、当たり前のことが特別だと話されていたことが印象に残りました。

町の風景は日々変わっていて、そこに何があったのか思い出せないこともあり、寂しいと話されていました。伝えていかなければ忘れてしまう、そう実感しました。

滋賀県でもカーボンニュートラルの発電方法が、検討されているところもあります。

米原市にあるヤンマーでは、もみ殻からバイオ炭を生成し、その過程で生まれるエネルギーを電力に利用するといった技術が開発されていることが分かりました。

カーボンニュートラルを目指すために、１人１人が情報をつかみ、ものの考え方を知っていくする必要があると話されました。

電力をはじめとしたエネルギーは、私たちに非常に身近なことです。取材を通して様々な考え方に触れ、紙面にしました。原発を稼働するべきなのかどうかは、正直はっきりとした答えを私から言うことはできません。しかし、それを分からないままにせず、伝えるということを通して自分自身、そして紙面を読んでくださった人が、自分ごととして、しっかり考えていかなければならないと思いました。

原発は、東京大学の開沼先生という方に、こちらにないんですけど、お話を伺ったんですが、原発は３Ｅを満たします。

しかし同時に、東日本大震災時の第一原発事故のような事故を起こす可能性を含んでおり、安全性が疑問視されます。

今回原発を訪れたのは震災から12年後のことです。普段着で町を歩くことのできるゾーンも多かったですが、やはりまだ防護服を着て作業されている場所もありました。12年たった今でも、事故後の処理は終わっていません。

また滋賀県の長浜市や高浜市などの一部の市では、UPZ の範囲内に含まれています。再生可能エネルギーでの発電は、環境負荷と安全性を満たしますが、エネルギー安全保障や経済的規制の観点から考えると、問題は多くあります。

このようにエネルギーには様々な選択肢があります。それぞれのエネルギーの特性を知り、いろいろなエネルギーの選択肢を持ちたいと思いました。

○滋賀県立彦根東高等学校１　10月に発表した第530号では、弱者×防災というテーマで特集しました。発案したのは私ですが、東日本大震災における死者というのは、１万5,821人で、そのうち60歳以上の高齢者の方の死者数が約66％の１万396人でした。また、障害者の死亡者数は、健常者の死亡者数の２倍以上だったということを知り、その理由と、今現在、障害者への災害対策はどうなっているのかを調べたいと思い、この特集を始めることになりました。

特集のテーマにある弱者というのは、障害者だけでなく、高齢者や小さな子供のような自力での避難が難しい人のことも含めています。

皆さんは防災介助士という資格を御存知でしょうか。聞きなじみのある言葉ではないと思いますが、防災介助士は、高齢者や障害者など、避難行動要支援者と呼ばれる人たちに支援ができる資格です。

公益財団法人日本ケアフィット機構で防災介助士をされている冨樫正義さんは、その支援について、避難するときに困ることは１人１人が違う。それに合わせて支援する内容も変わってくると話されました。避難とは、ただその場所から逃げることではなく、避難所での生活も含まれます。

紙面では、例として、トイレがバリアフリー化されているかどうかということが挙げられていますが、取材の際、冨樫さんはトイレだけでなく、エレベーターがついているか、体が不自由な人が通りにくい場所はあるかといったことを確認してほしい、と話されました。冨樫さんは、私たち高校生に向けて、祖父母や家の近所の人など、自分の近くにいる人のことを考えて、災害が起きたときに避難を促す声をかけるなど、行動に移してほしいと教えてくれました。

滋賀県甲賀市にある株式会社ユーベストでは、トレーラーハウスをホテルとして利用し、災害時には必要な人に提供する提携を甲賀市と結んでいます。これがトレーラーハウスです。写真が載ってるんですけども。動かすときには、ホテルになるコンテナの部分をトラックとつないで運ぶこともできます。この会社の代表取締役の上田京太郎さんは、甲賀市との提携では、災害時にはトレーラーハウスを動かすのではなく、支援が必要な人が入ってくることになっているが、地面との段差が大きいので、スロープが必要になるとの課題も打ち明けてくれました。

今回の特集取材を終えて、避難からその後の生活まで、幅広い視点で防災を学ぶことができました。

元日に発生した能登半島地震でも、大量の情報が人々の間を駆け巡りました。インターネットをうまく使えない人からすれば、情報も得ることも難しくなります。正しい情報を選び、インターネットを使えない人に伝えるということが必要になります。また、正しい情報を発信することも必要です。全員で生き残ること意識して、防災をしてほしいなと思います。

東日本大震災から12年経ち、記憶の風化という言葉の通り、震災を思い出す機会が減り、私達の記憶も薄れていきます。ましてや、東北から離れた滋賀県、近畿ではなおさらだと思います。今の高校生より下の世代は震災の記憶ないという人が大半で、まだ生まれていないという人も増えています。そういった人たちに、どうやってこの震災を伝えていくかというのが、今後の課題になるだろうと考えています。

その伝えるというのは、私たち新聞部の役目であると思っています。過去どのようなことがあったのか、そして現在何をしているのか、そして次の災害に備えるということが、また、絶対に知る必要があるのは、私たち若い世代になります。そういったことを考えるヒントを、私たち新聞部で与えることができたら、よかったなと思います。

今後は、能登半島で起きた地震について取材して、東日本大震災から変わったこと、活かされたことはあるかなと、何も変わってないということはあるかなみたいな、そういうことを調べて、関連性を調べていきたいと思います。滋賀県でも震度４を観測して、読者とする生徒たちも、関心が高いのではないかなと思います。

ご清聴ありがとうございました。

兵庫県立
尼崎小田高等学校

災害メモリアルアクションKOBE２０２４

「地域コミュニティづくり」
看護医療類型の特色を生かして！
「自助・互近所・共助」の取り組み！

兵庫県立尼崎小田高等学校看護医療・健康類型
花内　綺梨花　山口　和心　関　彩華
辻田　瑚心　藤井　千聖　正木　結菜

災害メモリアルアクション KOBE2024

「地域コミュニティづくり」
看護医療類型の特色を生かして！
「自助・互近所・共助」の取り組み！

兵庫県立尼崎小田高等学校看護医療・健康類型
花内　綺梨花　山口　和心　関　彩華
辻田　瑚心　藤井　千聖　正木　結菜

【１】「フレイル予防＆防災」災害時要配慮者を守る取り組み

超高齢社会の進展により、災害時に支援を必要とする高齢者の増加
⇒しかし、支える専門職の不足＆地域社会の関係性の希薄化
⇒一方、災害の激甚化・頻発化、南海トラフ巨大地震は必ず起こる！

災害時に備えた普段からの取り組みが必要
→フレイル予防と防災の観点

①フレイル予防
→フレイル・・・年をとることで心身の活力（筋力、認知機能、社会とのつながりなど）が低下した状態。
⇒1:栄養　2:運動　3:社会参加が大切

②災害時の目標　避難することができる⇒普段からの身体づくり、運動に慣れておくこと
災害食を不自由なく食べられる⇒普段の食事と災害食の差をなくす

①、②をふまえて フレイル予防体操の開発、災害食レシピの作成

【気づいたこと】
災害食・・生き延びるためのもの⇒おいしくて楽しい普段どおりの食事

災害食レシピを考える⇒新しい発見を得る⇒普段の食事に取り入れる

【様々な方からのアドバイス】
・必要な調理器具を掲載
・実際に高齢者が作り、食べられるのか→介護職の方（済）、高齢者と一緒に実習
・湯せん可能ポリ袋の使用方法
・栄養成分表、アレルギーの表示→使う食材が家庭にあるものであるため難しい

【介護職の方とのクッキングでのアンケート】
・ヘルパーさんがついていたり、自立している方なら作ることが可能
・練習は必要だが、レシピは分かりやすく簡単
・味や彩りがしっかりしていて食欲が増し、元気になる
・栄養、味や調理器具をあまり使っていない

・動画に収録する体操の動きの確認
体操の撮影方法の確認
⇒音楽をフリーBGM に変更して撮影
・撮影時の服装決め⇒2022年次のクラスTシャツで統一
・これまでの議論をもとに撮影を行い動画を撮り終えた。（動画編集中）

体操例①
いつもと違う非常食！しっかり噛んで、飲み込めますか？食べこぼし防止、脳の活性化、誤嚥性肺炎の予防にもつながるほか、唾液が よく出るようになり、おいしく安全に食事ができるようになる。

今年度の活動内容

【１】尼崎小田高校看護医療・健康類型×尼崎市
「フレイル予防＆防災」―災害時要配慮者を守る取り組み

「フレイル」＝健康な状態と要介護状態の中間に位置し、身体の機能や認知機能の低下が見られる状態を指すが、適切な治療や予防を行うことで要介護状態に進まずにすむ。（日本老年医学会）

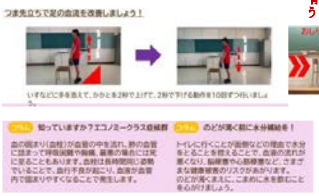
【２】災害時に生きづらさを感じる発達障がいを持つ人の
市民向けの理解促進のためのシナリオ作成、劇の上演
【３】「あまおだ減災フェス」の開催（11月12日）
地域コミュニティづくり・共助の取り組み
【４】 子ども向けワークショップ
防災すごろく、紙食器・スリッパ、簡易トイレの作成など

(防災食の取り組み)
【他の災害食との違い】
・現在、自宅避難が増えているなかで、「家で作る災害食」を作成
・フレイル予防の観点から、栄養のバランスが良く、噛んだり飲み込んだりしやすいこと
・簡単で、手間暇かけずに作られること

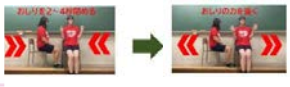
【意識した点】
・栄養バランスが取れている。
・時間、器具、手間を抑えられる。
⇒湯煎可能ポリ袋を使用
・常備しておける材料であること
⇒缶詰めや普段から使う食材で
【生徒の感想】
・災害食でも彩り・栄養バランスが大切だと思った。
・食材の工夫の仕方、組み合わせなど新しい発見があった。
など

(フレイル予防体操の取り組み)
【考察の視点と過程】
動画の構成とフレイル×防災（運動班）の動画作成にあたって抑えておくポイント
↳ 避難時に避難することができるため必要なことを確認
⇒体幹、柔軟性、筋力、バランス力
↳ 楽しく普段の日常生活に取り入れられるもの、仲間と楽しめるもの
（社会参加・地域コミュニティの重視）
⇓
各グループに分かれて動画の案を出し合う
↳どんな音楽にしたら体操が行いやすくなるのか
⇒動画内で落ち着いたBGMなどを流すようにする
避難行動、避難所での生活をシーンに分け、それぞれ「災害時＆フレイル予防に必要なこと」を確認・意見交流
↳身体の部位や体操の効果を考慮しながら、骨盤底筋、足腰を鍛えるなどの災害時に必須となることを議論し、5つのシーンに分け、簡単なものから徐々にレベルを上げて、仲間からのアドバイスなどを加える。

体操例②
同じ姿勢はNG！エコノミークラス症候群を予防しよう。
避難所で、長時間同じ姿勢でいることで、エコノミークラス症候群になるおそれがあります。トイレが近くなることを心配して、食事や水分を十分に取らない状態が続くことで、さらにリスクが高まります。エコノミークラス症候群の予防には下肢の運動により、血液循環を促すことが効果的と言われています



体操例③
避難所生活で困らないために！簡易トイレで排泄できますか？災害時は水道が停止して、手すりがない簡易トイレで排泄すること もあるでしょう。排尿や排便のコントロールをする骨盤底筋を鍛え、簡易トイレで あっても排泄ができるようにしましょう。
骨盤底筋運動で便秘・尿もれ・頻尿を改善しましょう！



椅子に座って、おしりを閉める動作をしましょう。おしりを閉める時間は1回2～4秒で OKです。音楽をかけてリズムに合わせて行うことがおすすめです。

【2】発達障がいを持つ人へ理解促進

発達障がいを持つ人が、災害時に少しでも生活がしやすい環境を構築するために高校生ができることを考える。発達障がいの理解促進のために市民に啓発するシナリオを作成、劇で上演。（2024年1月27日 小田南生涯学習プラザにて）

・杭瀬福成園（障がい者生活介護事業所）の職員から、講義を5回受ける。避難所対応のワークも実施（5月）
・杭瀬福成園の利用者さんと津波避難訓練。（7月28日）
・児童発達支援センターあこや学園から講義を受ける。（6月8日）その後、全員で園を訪問。（7月8日）
有志が夏休みに保育体験に訪問（9日間、延べ25名が参加）

・医療法人山西会三田西病院の藤田院長から「自閉症スペクトラム（避難所での対応）」を学ぶ。（10月23日）
⇒劇のシナリオ、完成！！

【3】
第6回「あまおだ減災フェス」の開催（11月12日）
「防災ファッションショー」
「防災すごろく」

『高校生の取り組み、継続性が素晴らしい』

【4】 防災すごろく、紙食器、スリッパ ＆
小学校への出前授業（携帯・簡易トイレ作成）
（８月24日、10月１日
11月５日、11月12日
12月18日）

『トイレが大切！水、電気止まる
我慢できない、その通りだ！』

○兵庫県立尼崎小田高等学校１　今から兵庫県立尼崎小田高校看護医療健康類型防災班の発表を始めます。テーマは地域コミュニティづくり、顔の見える関係づくりです。よろしくお願いします。

今年度の活動は主に４つあります。第１に、尼崎市と一緒にフレイル予防＆防災をテーマとした災害時要配慮者を守る取組です。フレイルとは健康な状態と要介護状態の中間に位置し、身体的機能や認知的機能の低下がみられる状態を指します。それを防ぐために、栄養・運動・社会参加の３つが大切だと言われています。この活動は災害食班とフレイル予防運動班に分かれて行いました。

第２に、災害時に特に生きづらさを感じる発達障害を持つ人の市民向けの理解促進のため、シナリオの作成、劇の上演をすることです。

第３に「あまおだ減災フェス」の開催です。

第４に、子供向けに防災すごろくとワークショップを行いました。

第１のフレイル予防＆防災の目的を説明します。現在、超高齢化社会に突入し、災害時に支援を必要としている高齢者が増加しています。しかし、支える専門職の公助の不足や、地域社会の関係性の希薄が見られます。

一方で、30年以内に南海トラフ地震が起こる確率が80％を超えるということに加え、自然災害の激甚化・頻発化が問題となっています。

そこで私たちに、高齢者を支える仕組みがより強固なものである必要があることから、私たちにできることを考えました。その１つがフレイル予防の栄養の視点から、災害食のレシピを作成すること、もう１つが運動の視点から、フレイル予防体操を開発することです。

○兵庫県立尼崎小田高等学校２　災害食レシピの作成について説明します。

近年、新型コロナウイルスなどの感染症の流行や、避難所ではプライバシーの保護が難しいことなどから、災害時の自宅避難に目が向けられています。積水ハウスの調査によると、全体の８割以上が災害時の自宅避難を検討しているという結果が出ています。また、現在の超高齢社会における高齢者支援を強化、強固なものにしていく必要があります。

私たちのオリジナリティはそれらに対応して、普段から備えるという点と、フレイル予防と防災を掛け合わせた点にあります。

レシピ考案にあたって意識したポイントは、そのほかにも、普段から食べられている料理であることや、味や硬さを調節できることなのです。

２回の実施を経て、生徒同士で指摘し合い、湯煎可能ポリ袋を使用するなどの改善を行いました。生徒の感想では、災害食でも彩りや栄養バランスが大切だと思った、食材の工夫の仕方、組合せなど新しい発見があったなどの意見が上がりました。

全体を通して、災害食イコール生き延びるためのものではなく、おいしくて楽しい普段通りの食事があるという意識や、災害食レシピを考えることで新しい発見を得て、普段の生活に取り入れるという繰り返しが大切で、災害に備えるというのはただ単に物品などを準備するだけではなく、普段と災害時の差をなくすことで、なるべく不慣れな環境をつくり出さないことだという気づきを得ることができました。

そしてレシピ集を紹介し、改善点を募ったところ、たくさんのアドバイスをいただいたのですが、栄養成分表の表示など改善が難しい点もありました。

また、先日、介護職の方とクッキングを実施し、２月には高齢者を対象に行う予定です。そのときのアンケートで多かった意見では、自立した高齢者やヘルパーさんが一緒について、やる分には十分可能だけど、１人でやるとなると、やはり前もって練習が必要だということです。食材をもう少し小さく切ったり、切り方を載せたりというような改善点も見つかりました。レシピの中で意識されていると感じた点を尋ねたところ、私たちが意識したポイントがきちんと伝わっていることが実感できたのがうれしかったです。地域コミュニティというテーマを目指して、災害食作りを一緒に行う機会を定期的に設けることが大切だと思いました。

○兵庫県立尼崎小田高等学校３　次に、フレイル予防体操の取組についてお話ししていきたいと思います。

フレイル予防体操の動画を作成するに当たって、市役所の方や理学療法士の方などのアドバイスを得て、災害時に避難ができる体作りを日常的に楽しく行えるような体操の動画を作成しました。そして、各グループに分かれて動画の案を出し合い、どうやったら楽しんでもらえるのか、日常生活に取り入れてもらえるのかをアドバイスし合い、そのアドバイスを基に何度も試行錯誤を繰り返し、作成していきました。

そして、その中でも最も工夫して取り入れた体操を３つ紹介したいと思います。

第１に、いつもと違う非常食、しっかりかんで飲み込めていますかというもので、これは食べこぼしや誤嚥性肺炎の予防にもつながるだけでなく、脳の活性化や唾液がよく出るようになることで、美味しく安全に食事が取れるようになるという体操です。

○兵庫県立尼崎小田高等学校４　２つ目は同じ姿勢はNG、エコノミークラス症候群を予防しようです。これは避難所で長時間同じ姿勢でいることで、エコノミークラス症候群になる恐れがあるので、下肢の運動により血液循環を促すことで、エコノミークラス症候群を予防しようという体操になっています。

３つ目は避難所生活で困らないために、簡易トイレで排泄できますかという体操です。これは災害時に簡易トイレで、少しでも楽に排泄ができるように、排尿や排便のコントロールをする骨盤底筋を鍛え、便秘・尿漏れ・頻尿を改善しようという体操です。

これらの災害食レシピやフレイル予防の動画は１月中に完成して、学校や市などのホームページで掲載する予定です。

○兵庫県立尼崎小田高等学校５　続いては、発達障害への理解促進についてです。

私たちは災害時に発達障害を持つ人が生活しやすい環境をつくるために、高校生で何ができるかを考えました。現在、発達障害の理解促進を市民に啓発するためにシナリオを作成し、劇を上演します。劇を上演するに当たって、以下のようなことを学びました。

第１に杭瀬福成園の職員の方から、発達障害に関する話を計５回聞きました。

第２に杭瀬福成園の職員の方と障害を持った利用者の方と一緒に、実際に避難訓練を行いました。

第３にあこや学園に訪問し講義を受けました。

第４に三田西病院の藤谷院長から、自閉症スペクトラムについて学びました。

これまで学んできた発達障害の特徴・対応をしっかり捉えて、シナリオを組み込むことを意識しながら制作しています。

○兵庫県立尼崎小田高等学校６　次に「あまおだ減災フェス」についてお話します。

「あまおだ減災フェス」は今年で６回目を迎え、兵庫県立大学と協力し企画してきました。市民の方たち向けに、防災すごろくや防災ファッションショーを行いました。

防災ファッションショーは、兵庫県立大学の学生と本校生、市民の方でグループをつくり、防災Ｔシャツを作成し、ファッションショーで披露しました。

そのほか、防災をテーマに活動するアーティストの方のライブなど、防災を通じて市民の方とつながりをつくりました。市民の方からは、防災の取り組みや継続性が素晴らしいといったお声をいただきました。

次に、子供向けワークショップについてお話します。これまでに計４回イベントを行い、老若男女多くの方にご参加いただきました。子供たちや親御さんたちに、防災について考えていただけるいい機会になったと思います。

また、12月８日に小学校で簡易トイレの大切さや、作り方の出前授業を行いました。簡易トイレが大切な理由としては、災害時に食事は我慢できるけど、排泄行為は我慢できないという理由が挙げられます。小学生に簡易トイレの大切さについて、知ってもらえたと思います。

以上で発表を終わります。ご清聴ありがとうございました。

TEAM-3A

TEAM－３Aの2023年

グループの活動

単独行動ではなくなった！

2023.12.8明石市・社協・コープこうべとの第５回合同連絡会

TEAM-3A

Produced by 特定非営利活動法人TEAM・あげあげ

【CONCEPT】いつでも・どこでも・だれでも楽しく「ぼうさい」

チーム名の三つのAは A(akashi)A(association)A(age) 明石のyouthが地域防災に取り組むチームを表します。

1. チーム紹介

２０２２年５月、明石市内の高校生が幅広く地域防災の活動に取り組むために自主的に集合。NPO法人TEAM・あげあげのサポートでユースによる地域防災チームを結成!!

昨年度テレビ・新聞等で紹介されたことでイベントへの依頼が増えました。現在のメンバーは２７名(高校生９名、学生１５名、社会人３名)

今年度から明石市（市民生活局・政策局）・社会福祉協議会・コープこうべ第６地区本部・兵庫大学との連携により活動のエリアが広がってきました。

広報あかし12月号記事

11月19日放送「明日をまもるナビ」

2. オリジナリティ

Ⅰ　「できることをできる人がする」自主性重視のチーム

Ⅱ　視点を地域コミュニティに置いた取組み

Ⅲ　手作り感覚の活動

3. 2023年(2023.1～12)のトピックス

1月 NHK番組「LibeLoveひょうご」にナマ出演しました！

夕方の６：３０から主に兵庫県内で放送されているNHKの地域情報番組への出演依頼がありました。午後3時頃から打合せやらリハーサルやらで大変な1日となりました。
内容は1年前のサンTV「ひょうご発信」と同じオリジナルゲーム「あにまるず」でした。翌月にはNHKの全国放送「明日をまもるナビ」の「チコちゃんに褒められる」でも紹介されました。

4月 初めての「遠征」

2013年明石南高校でスタートしてから9年間明石市内の学校周辺地域が主な活動場所でしたが、学校から独立したチームになってから活動のエリアが広がりました。
4月3日(日)の桜満開の西宮マリナパークシティで行われた「さくら祭り」に招待されました。初めて明石市から遠方のしかも野外での実施となりました。

7月 ぼうさい替歌「大きな地震」

３年前明石市内の高齢者施設菁華苑の代表の方からの依頼で半年をかけて作った「大きな古時計」の替歌「大きな地震」と歌詞の内容に合わせた振付。歌詞の内容は地震が起こって避難する時の「自助」と避難生活での「共助」の大切さが織み込まれています。今年度ようやく実施できました。１１月１９日放送の「明日をまもるナビ」でも紹介されました。

◎TEAM-3A Original のコンセプト

●2018年高齢者から子どもまで楽しく防災に取り組める体験型ゲーム「にげろ！あにまるず」が完成しました。これは🐻🦁🐶の家族が地震発生から避難グッズを持って避難所に急ぐという趣旨のゲームです。
●その後「にげろ！あにまるず」のゲームボード版、さらに2020年の4月に避難所に替いたあにまる一家が避難所で起こるトラブルを解決しながらゴールに向かうという続編の「かいけつ！あにまるず」を作成しました。
●このゲームは備えをしていなかった家族が地震が起こってからあわてて避難グッズを探し、体の不自由な家族を助けながら避難する「自助」と避難所で起こる問題と向き合う「共助」の大切さを体感できるようになっています。

説明や振り返りまで含めると開始から終了まで平均１時間半かかる「あにまるず」の実施時間を短縮するために、今年度後半から避難所編「かいけつ！あにまるず」に代わってカード版のHUGを使うショートバージョンを実施しています。避難編に参加したグループにそれぞれ対応を考えてもらって意見交換することでゲームの趣旨を活かせます。

「カード版HUG」の避難者カード36

「大きな地震」というタイトルですが、歌詞の内容はチームのコンセプトそのものです。

大きな地震が起こったら頭を守ろう
あわてないで転ばないようにみんなで避難しよう。
⇒　自助
避難したら声をかけよう
大切な仲間と手をとりあを合わせて助け合おう
⇒　共助

◎2022年のTEAM-3A

7月　明石市防災会議

8月　災害メモリアルアクションKOBEキックオフ会

8月　まちづくりワークショップ

8月　保育園ぼうさいきょうしつ

10月22日(土)
TEAM-3Aは「ぼうさいこくたい」のワークショップ部門で採用されました!!
実施したのは「あにまるず」体験会。
消防の関係や防災士、大学の先生など防災の専門家が参加されましたが、みんな「いつもどおり」でした
驚いたのは最後は斎藤元彦県知事まで参加！このゲームの作成責任者だった卒業生の濱ちゃん(濱田桃花)が対応しましたが、説明を熱心に聞いてくださいました。

8月　Bスポーツ～明石の変わった運動会～

TEAM-3Aの定番イベントとなった「あにまるず体験会」

小学生から高齢の方まで幅広く対応!!　今年度は11回実施

○ TEAM-3A 1　皆さん、こんにちは。TEAM-3A の松岡です。

○ TEAM-3A 2　TEAM-3A の里永です。今から２分間の紹介動画を流したいと思います。

〔映像視聴〕

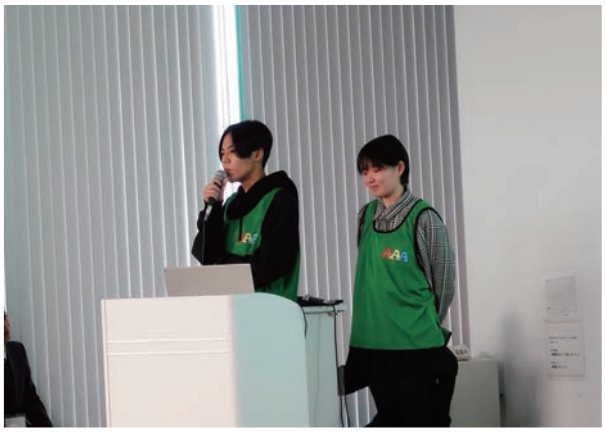
○ TEAM-3A 2　TEAM-3A の活動目標は「いつでも・どこでも・誰でも・楽しく」です。この目標設定の理由は２つありまして、その１つ目が、土手の花見の教えが関係しています。土手の花見が何かっていいますと、簡単に言えば、冬に凍って緩んだ土手を花見しに来た人たちが、意図せず緩んだ土手を踏み固め、結果的には大雨や台風からの土手の決壊を防ぐということです。つまりは、楽しいことで災害から人を守れるということです。

２つ目は、楽しくやっていきたいからです。これがどういうことかといいますと、例えば皆さん、クラブ活動とか、いろいろ趣味とかあると思うんですけど、楽しくなかったらやってないですよね。楽しいからこそやってるんですよね。例えば我々学生だったら、楽しくなかったら数学とか、いろんな方程式とか解き方とかあるじゃないですか、面白くないから頭に入ってこないですよね。でも、それが面白かったら伝わりますよね。頭の中にすっと入ってきますよね。つまり何が言いたいかといいますと、楽しいことで防災が広がるということです。

さて、我々 TEAM-3A は、2023年イベントの依頼がとても増えまして、明石市内から市外へと進出しました。

西宮市や神戸市、加古川市、明石市内からの依頼数は過去最大となりまして、とっても忙しくなったということです。

あと、2023年は単独行動ではなくなったことが挙げられまして、このパターンとしては、他の団体との連携が始まりました。他の団体というのは明石市民政策局＆政策局、明石市社協やコープこうべ、明石市内の地域団体やボランティア団体、つまりは支えてくださる方がとても増えたんですよね。



これは明石市社協さん、コープこうべとの第５回の合同連絡会でして、ここでは、もっと仲間を増やしたい、活動エリアを広げたいという旨を伝えているって感じです。

○ TEAM-3A 1　TEAM-3A はこれからの可能性として、１つの学校の活動ではなくなるということがあります。兵庫大学さんや高砂高校との連携が始まり、明石市との連携によるユース育成、今年度には市内在住の在学中高生と学生を募集することを検討しており、つまりチームが大きく変わります。

そして、昨年度、ぼうさい甲子園にて、特別支援学校団体の部で奨励賞を受賞させていただきました。その TEAM-3A が地域に報せたこと、それは「共助」とそのための「地域での繋がり」の大切さです。

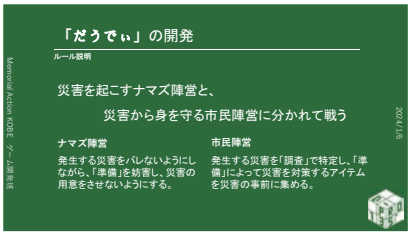
なぜ共助が大切か。自助は災害発生からその直後のことです。障害を持った方や、経済的に苦しい家族、１人暮らしの高齢者にはできないことが多いです。共助は地域が復旧し、復興するまで続きます。地域の人々がそれぞれできることで協力すればいい、つまり共助には未来があります。

今回の能登半島の地震で、耐震や防火の不備や高齢化で、共助が成り立たなくなっていることが問題となっています。TEAM-3A はこの問題と向き合って、今年度も活動を続けていきたいと思います。

以上で TEAM-3A の活動報告を終わります。ご清聴ありがとうございました。

国立明石工業高等専門学校

D-PRO135°（明石高専防災団）開発チーム



D-PRO135° 明石高専防災団 開発班

今までの活動 Past Activities

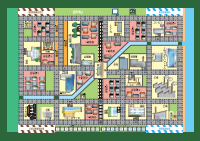
私たちは「防災を楽しく、身近に」をコンセプトとして、防災について興味を持ってもらうきっかけとなるようなゲームづくりに 取り組んでいます。

TAY!

避難所トラブル解決ゲーム
避難所で発生したトラブルに、与えられアイテムで対応
発想を競う形のゲーム

RESQ

遊ぶことで地震災害後の共助について学ぶことができる防災ボードゲーム



新たな活動 New Activities

だうでぃの開発

だうでぃは知名度の高い人狼ゲームと災害の学習を絡めた防災ゲームです。このゲームは、災害時必要な人手とされる中高生以上の世代が対象であり、情報が錯乱する災害時、緊急時での話し合う能力の向上を目的としています。私たち世代に防災への関心が持てるようゲーム性を高くし、楽しく論理的にゲームを進められます。

～ゲーム説明～

災害を起こすナマズ陣営と、災害から身を守る市民陣営に分かれて戦うゲーム。
市民陣営は発生する災害を「調査」で特定し、「準備」によって災害を対策するアイテムを災害の事前に集めます。
ナマズ陣営は発生する災害をバレないようにしながら、「準備」を妨害し、災害の用意をさせないようにします。
災害発生時に対応したアイテムを用意していれば市民側の勝利。
防災アイテムを用意しきることが出来なければ、ナマズ側の勝利。

災害・調査・準備の表

準備するもの

＜役職＞

人ごとに「役職」があり、その人にしかできないことがある。それぞれの役職を活用して災害を対策！

市民陣営

「調査」とは
1ターンにつき1種類、その情報がどうなのか調べられる
ex) 1次災害 or 2次災害

「準備」とは
1ターンにつき1つのものを用意できる。
ex)スニーカー、食料etc

ナマズ陣営

ナマズ
バレないように市民に化けるのもアリかも、、？

悪質ネットユーザー
市民陣営が調査準備したものを妨害しよう
この役職は誰か公開されている。

＜期待される効果＞

災害に準備するべきものが知れ、話し合って災害から身を守ることができる（共助）。

「妨害」によるアイテムの劣化は実際のケースに反って行っている。また、このネット社会に悪質インフルエンサーが、デマを流して災害被害を助長することがある。「情報を整理して話す能力をつける」ことで、避難所など緊急時でもその意識を持って立ち回れるようになり、避難所運営をうまくこなすことができる

＜テストプレイ＞

定例会でテストプレイ →改善案をもらう。

〈改善案〉
悪質ネットユーザー 同じ妨害をできなくする。
ゲームマスターのルール把握の負担が大きい
→アプリ化することで楽に！
⇨ 来年度だうでぃの改良

情報発信 Information

Instagram
D-PRO135°［明石高専防災団］
135_d_pro

X
D-PRO135°［明石高専防災団］
@135_d_pro

HP
https://sites.google.com/view/d-pro135

Facebook
明石高専防災団 @d.pro135.e

○国立明石工業高等専門学校１　皆さんこんにちは。明石高専 D-PRO135°ゲーム開発班の中前です。今から発表を始めさせていただきます。

ゲーム開発班では、楽しく防災を学ぶことをモットーに活動しています。今回の活動報告は、新ゲームの開発、課題の発表、テストプレイ、改良内容などです。

まず初めに、これまで開発してきたゲームを紹介します。ボードゲームとして「SECOND HAZARD」、「RESQ」、避難所運営ゲームとして「チャレンジ！」、カードゲームとして「TRY！」などがあり、その中でも「RESQ」は、地震が起こったときに発生する様々なトラブルをボードゲーム形式で解決していくゲームであり、主に共助の考えを見つけるのに役立ちます。

次に「TRY！」です。これは昨年度、体験していただいたところもあると思います。アイテムカードを使って避難所トラブルを解決していくゲームで、緊急時における頭の柔らかさを鍛える効果があります。

それでは、新ゲームの開発について説明します。この前の発表のときには名前は未定でしたが、名前が決定いたしました。その名も「だうでぃ」です。doubting・disasters、災害を疑うと書いて「だうでぃ」と読みます。「だうでぃ」とは、情報が錯乱する災害時に話し合う力を身につけることを狙いとしたゲームです。

ルールとしては、災害を起こす「ナマズ陣営」と、災害から身を守る「市民陣営」に分かれて戦います。「ナマズ陣営」は発生する災害をばれないようにしながら準備を妨害し、災害の用意をさせないようにします。「市民陣営」は発生する災害を調査で特定し、準備によって災害を対策するアイテムを災害の事前に集めます。

この表を基に、「ナマズ陣営」は妨害をし、「市民陣営」は調査・準備によって災害を対策するアイテムを2.5ターンごとで進めていきます。

災害が発生したときに、災害発生時に対応したアイテムも用意できていれば、市民側の勝利、防災アイテムを用意し切ることができなければ、ナマズ側の勝利です。

このゲームは人ごとに役職があり、その人にしかできないことがあります。それぞれの役職を活用して、災害を対策します。「市民陣営」には防災士と情報局がいます。これはいわゆる市民と占い師の役目です。防災士は調査準備ができ、情報局は特定準備ができます。

詳しく説明すると、調査とは１ターンにつき１種類、その情報がどうなのか調べる。例えば、一次災害なのか、二次災害なのか。準備とは、１ターンにつき１つのものを用意できる。例えば、スニーカー、食料、ラジオ、飲料水など。

特定とは１ターンにつき１回、全ての災害のうち１つを選び、それが発生するかしないかを調べる。例えば、大雨、地震、火災などの災害の種類を表します。

災害ごとに必要なものが違うため、対応したものを用意しておく必要があります。また、災害ごとの準備物がないと準備失敗となります。

「ナマズ陣営」は、ナマズは災害を発生させ、ひたすら騙します。悪質インフルエンサーは、準備妨害、調査妨害を行います。この悪質インフルエンサーはゲーム中に公開された上で、ひたすら妨害を行ってい

きます。

「だうでぃ」の工夫点として、基本的には人狼を探す、論理的に考察する、正体の分からない人を疑う、嘘をついて人を欺く、話し合うという面白さに加えて、人狼ゲームとの相違点として、「処刑」がないということがあります。これは早期に処刑されて、ゲームに長時間参加できないということがないようにするためです。

「だうでぃ」が皆さんに与える効果として、災害に準備するべきものが知れる点、話し合って災害から身を守る点、妨害によるアイテムの劣化は、実際のケースに沿って行っている点、このネット社会に悪質インフルエンサーがデマを流して、災害被害を助長することがある点などで、与えられる効果があります。

今まで、月１にある定例会でテストプレイを行ってきました。テストプレイを５回ほど行っていますが、どれもナマズ側の勝利となっていて、まだ災害を発生して、抑えられていません。

テストプレイを行った結果、感想としてターン数がちょうどいい、楽しかった、ご意見としてゲームマスターの負担が大きいというのと、情報の整理が大変という難しいものとなっています。

そこから改善して、役職の種類を減らして分かりやすくしました。そして悪質ネットユーザーが妨害できるように、今から改良していくこととしては、ゲームマスターの負担が大きいので、アプリ化というのと、情報の整理が大変っていうので、全員に表を配り、一番大事なアプリ化をしていきたいと思います。

「だうでぃ」の対象年齢は、私たち世代中高生から若者になっています。その理由として、私たち世代に防災への関心を向けさせたいからです。人狼ゲーム自体、欺くや論理的思考をすることから、少し難易度が高いため、小学生の小さい子向きではないと思います。ゲームに関心を持たせることで、防災の教育をしていきたいと思います。

次年度の活動計画は、「だうでぃ」の開発・改良を重ね、実物を作ります。そして、「だうでぃ」の実施体験と、今まで作ってきた「RESQ」など、「TRY！」などのゲームの改良を行っていこうと思います。

ありがとうございました。

国立明石工業高等専門学校

D-PRO135°（明石高専防災団）地域連携チーム

D-PRO135°
明石高専防災団 地域連携班

防災イベントへの参加

今年度も高齢者施設や社会教育施設などで開催された多くの防災イベントへ参加し、「楽しい防災」をテーマに防災ゲームや講義を通して幅広い世代に防災を広める活動を行いました。

TRY!は、昨年度の中間発表会や今年度のキックオフ会でいただいたフィードバックをもとに、ゲーム説明やゲーム進行の改良も行いました。

今年度は、幅広い世代に適した接し方も身につけることを目標としました。

毎月行う定例会で、最近参加した防災イベントで学んだことを部員同士で共有しあい、更によい活動となるよう努めました。

地域の学校での防災授業

今年度も兵庫県内の複数の中学校や高専で防災授業を行いました。オリジナルゲームゲーム「チャレンジ！」を用いた避難所運営についての講義だけでなく、学年ごとにそれぞれクロスロードゲームや自作の防災クイズなども授業に組み込み、D-PRO135°が継続的に防災授業を行っている中学校に対し、毎年別の内容の講義ができるように対応しました。

今後も若い世代に防災について知ってもらうという活動を続けていき、授業を行う地域の特色に沿った講義を行うなどの工夫で更にその質を高めていきたいと考えています。

明石高専生に防災を広げる

今年度は、一番身近な存在である明石高専生に目を付けました。一年生で受ける”防災リテラシー”から防災に触れていない学生も多く、避難訓練の回数も少ない為、定例会に明石高専生を呼びゲームを体験してもらいました。

放課後のいつものゲームのように楽しめたなどの感想があり、来年度はこの活動をさらに発展させたいと思います。

魚住まちづくり協議会との連携

今年度は、明石まちづくり協議会の防災イベントに参加しました。魚住小学校コミセンで「みんなde防災を話そう」が開催されました。

座談会では、地域の人と防災について話しました。そして、話した内容を部員がまとめ、次の座談会で共有しました。

また、D-PROが開発したTRY!をアレンジし魚住小学校の子供たちと体験しました。

地域の人とお話しすることで、緊急時も協力し合える関係になることが出来ました。

今後の活動

現在、複数の団体からイベント協力依頼が届いています。今後も、「実は防災って楽しい！」のキャッチフレーズを伝えていくために、自分達にできる取り組みをすすめていきたいと考えています。

X

D-PRO135°［明石高専防災団］
@135_d_pro

Facebook

明石高専防災団 @d.pro135.e

HP

https://sites.google.com/view/d-pro135

Instagram

D-PRO135°［明石高専防災団］
135_d_pro

私たちの活動
About D-PRO135°

2015年夏に結成された
明石高専防災団 D-PRO135°は
有志の学生が集い日々さまざまな
防災への関わり方を見つけるために日々活動しています。

○国立明石工業高等専門学校２　今から地域連携班の発表を始めます。本来の登壇者である地域連携班の西田が体調不良で欠席のため、代わりに中前（開発班）が発表します。よろしくお願いします。

発表内容は2023年度活動成果と今後の活動についての２つです。

まず、今年度の活動について、今年度は次のような活動を行いました。９月のキックオフ会で話したそれぞれの活動の目標とそれに対する成果も発表します。

地域の学校での防災事業、防災イベントの参加、明石高専内での活動の３つです。

１つ目の地域の学校での防災事業についてですが、今年度もありがたいことに、複数の学校から防災事業の依頼をいただきました。防災事業を行うために、部員で感想や反省を共有し合い、よりよい授業になるように努めました。

９月に発表した学校での防災事業における目標はこちらです。今まで以上に各小中学校に合った事業内容にする、というものでした。

授業内容を変えるのはレベルが高かったので、まずは授業の初めに行うアイスブレイクに取り入れてみました。この写真は、岩岡中学校で使用したスライドの一部です。授業スライドを作成するときに、ストリートビューで学校を確認し、答えを発表した後に、貼られている場所やマークの意味を伝えました。授業を受ける人の身近にあることを取り入れたことで、ぐっと授業への興味を引きつけたように思いました。ちなみにこの問題の答えは、この緊急避難場所のマークです。左から、津波避難場所、老人ホーム、津波避難場所、裁判所となっています。

今年度の活動２つ目は、防災イベントの参加です。スライドにあるように、たくさんの依頼をいただきました。しかし、イベント主催者からの声がかかって防災ゲームのブースを出展する形ばかりだということ

で、９月にこの目標を発表しました。自分たちでイベントを見つけて参加し、新たな発見やつながりを得ようというものです。

定例会で防災イベントを共有する。市民救命士講習に防災士試験を受けていない人も誘って参加するなども行いました。幼稚園訪問を行っている部員もいるので、そこで私たち D-PRO が参加し、防災訓練を行うのはどうなのかも話しています。

今年度活動、３つ目は明石高専内での活動です。これは今まであまり行っていない活動でした。明石高専生に防災ゲームを体験してもらうことで、D-PRO 以外の学生も防災に触れる機会をつくる。意見を聞き、ゲームの改良につなげる、とお互いに Win-Win な関係を目指すことが目標でした。

11月の定例会で計画を立て、12月の定例会で第１回目の活動を行いました。教えている人以外、一般の明石高専生です。こちらの左側の学生のほうは、普段放課後にオンラインゲームばかりする学生です。初めは15分ぐらいでも帰っていいって言っていた学生も、１時間ほど遊んでいました。

参加者からは、ハプニングカードがリアルで実際の避難所生活をイメージできた、普段災害のことはあんまり考えへんから、災害について考える機会になれた、と感想をいただきました。この活動をさらに発展できればと思います。

以上が今年度の活動でした。

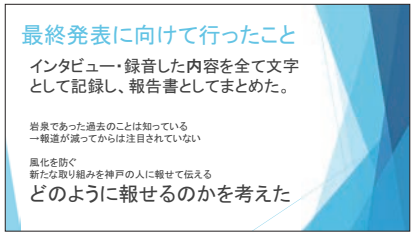
最後に今後の活動についてです。

まずは今年新たに行った取組を今年で終わらせず、来年も続けていきます。

そして、新しい防災ゲームを私たち地域連携班が学内外で使用することで、ゲーム開発班の改良につなげます。また、来年はこのメモリアルアクションと同様、私たち D-PRO も、結成10周年を迎えます。過去を振り返り、D-PRO を築き上げてきた先輩方と関わるなど、節目の年として活動できればと思います。

以上で発表を終わります。ありがとうございました。

神戸学院大学
現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ



災害メモリアルアクションKOBE 2023
～岩泉町を「報せる」～

神戸学院大学/現代社会学部/社会防災学科/安富ゼミ

H28年台風10号　被害聞き取り調査

令和５年８月2日、岩手県岩泉町を訪問しました。9人の犠牲者を出した「高齢者グループ施設楽ん楽ん」の被害状況や「岩泉メソッド」ついて、岩泉町災害対策室長の方からお聞きしました。
また実際の被災体験を「岩泉ホールディングス」「フレンドリー岩泉」の方からお話を伺い、災害の教訓や今後のすべき行動について一緒に考える機会を得ました。

(岩泉市役所にて話を聞く安富ゼミ生たち）

「岩泉メソッド」を活用した避難訓練

「岩泉メソッド」とは、ふれんどりー岩泉(高齢者施設)と岩泉乳業(企業)の協力体制・避難方法の総称を指します。「楽ん楽ん」地域住民と行政の組織化を図る新しい取り組みです。

災害時に協力し合い、避難行動を取ることで、迅速な避難行動を促します。
山に囲まれ、住む場所や施設が集中している岩泉に適した方法となっています。

○神戸学院大学１　今から神戸学院大学現代社会学部社会防災学科安富ゼミの発表を始めます。発表者は在里、服部、堀川の３人です。よろしくお願いします。

僕たちが発表するテーマは、岩泉町を「報せる」となってて、神戸、関西の人たちが知らない情報を報せていこうかなって思っています。

まず、防災聞き書き隊について、おさらいをしていきます。中間発表と重なる部分もあるんですけど、私たちは防災聞き書き隊として、元マスメディア関係者である安富教授の下で、災害情報について学んでいます。インタビューやヒアリング、アンケート調査を通して、災害に対する意識調査の第一歩となるような報道をしています。

次は東北の調査の内容になってきます。昨年の2023年８月１日から４日にかけて、岩手県に調査に行ってきました。釜石市で、釜石の軌跡について研究したり、大槌町の NPO 法人吉里吉里国を訪れたりもしたんですけど、今回発表するのは２日目に訪れた岩泉町です。

○神戸学院大学２　私たちは、８月２日に私たちは岩手県の岩泉町の町役場のほうに足を運びました。スライドの写真は、実際にヒアリング調査をしているときの写真になります。

被害調査をヒアリングしたのは、平成28年、2016年８月30日に起こった台風10号の調査についてです。この台風は東北地方の太平洋側から上陸した台風となってまして、このような上陸ルートは過去に例を見ないものでして、そのため太平洋側の地域の方々は、その台風被害やその危険性について、予測・想定ができなかったとなり、このような被害が起こりました。この台風で岩泉町を流れる小本川という２級河川が氾濫し、その結果、その川の近くにあった高齢者グループホーム施設の楽ん楽んという施設の入居していた入居者全員９名が亡くなるという悲劇になってしまいました。この災害から、避難準備情報の在り方が変わったっていうのは皆さんご存知ではないでしょうか。避難準備情報、普段行政とか町役場の人とかが出すんですけど、そのときの本来の目的はというと、高齢者とか障害者、妊婦や子供とかそういった避難に時間がかかる人は、もう避難を始めてくださいという本来の意図があるんですけど、防災に興味のない人からすると、避難準備情報は、ああ避難の準備したらええんか、まあするか、ってなると思うんですよね。その状態の情報の発信のほうと受け取り手のほうが、解釈が異なってしまったことによって、このような災害が生まれてしまったのではないかなって考えられています。この報道は、いろいろメディアとかニュースとかやってたと思うんですけど、それの影響があって、避難準備情報っていうのが高齢者等避難開始などのように項目が変わりました。このことは、皆さんちょっとご存知なかった方も多いんじゃないかなって思ってます。

今回の調査やそのニュースなどの、実際にしていること以外に、新たに情報を仕入れてきたことをまとめてみました。まず８月30日の岩泉町の避難準備情報の発令の際、被災地ではほとんど雨が降っていなかったといいます。その先ほど申し上げた小本川という川の上流の方は、かなり雨が降っていたということですが、被災地の現場では、あまり雨が降っていなかったっていうことで、それほど危機は感じていなかったと今回のヒアリングで分かりました。また避難者も避難後のことを考えて、避難を結構ギリギリまで粘っていたと

いうお話も伺いました。これは、楽ん楽んの利用者が実は９名全員認知症を患っていまして、認知症の患者さんっていうのは避難をしたりすると、新しく避難場所の環境が変わりますので、その結果、自傷行為を行ってしまったり、あと徘徊または認知症の悪化などといったデメリットがありますので、そういったことを考えて施設側は避難をできるだけギリギリに、かつ迅速に行おうとしていたみたいです。

まとめると避難準備情報に対する認識の違い、あと、上流の方だけ降っててそっから急に悪化したって感じで急な水位の上昇、そしてギリギリまで避難させない考え、これらの要因が組み合わさった結果、災害や被害が発生してしまったのではないかと考えさせられました。

被災後の取組についてです。

その楽ん楽んの施設の隣にあった岩泉ヨーグルト、大谷翔平選手が絶賛しているヨーグルトなんですけど、そのヨーグルトを作っている岩泉ホールディングスさんっていう会社があるんですが、そこと協定を結びました。災害発生時に高齢者施設と連携を組んで避難をさせる取組になっています。こういった異なる企業さん同士が協力してやる体制っていうのはなかなか例を見ない体制です。私たちはそれを岩泉メソッドと名づけています。実際の避難行動時も、体力のある若手が積極的に避難行動をするなどよい傾向が見られているそうです。

実際の避難訓練の様子がこちらになっています。実際に体験した様子は、利用者・支援者・誘導係の３つの役に分かれて、さらに支援者と誘導係に、支援の主任を設けてトランシーバーでやり取りをします。これは携帯電話が使えなくなったことを想定してとのことでした。誘導係と支援者の受入れや要請が完了したときに、このようにトランシーバーでやり取りをして、実際に避難をしています。こんな感じで車椅子に乗っているんですけど、車椅子に乗っている人とかは、やっぱり自力歩行が困難なので、そういった人には発電式利用のエレベーターを使っています。それ以外の方では、できるだけ階段を使うようにしてるんですけど、その階段を使う人っていうのも、１人に対して２人で介助しないといけないので、そういった面でかなり大変だなと思いました。

○神戸学院大学３　東北調査で学んだことなんですけど、東北調査に今回初めて行ったことで、ゼミ生みんなが共通していた感想は、実際行ってみないと分からないことがあるということです。今回の調査で、行政

側や施設側の対応の様子や、被害発生までのタイムライン、被災者の経験など実際に足を運ばないといけないことがたくさんありました。そういった仕入れた情報を報せていくというのが、防災聞き取り、聞き書き隊の使命だと、今回の活動を通して感じました。ご清聴ありがとうございました。

神戸学院大学
クローズアップ社会研究会

本編動画について

【投稿状況】
・現時点で、3～4本アップロード予定
・うち、1本「高御位山」の動画は公開中！
・他の動画については、順次 投稿予定

【動画制作への想い】
・楽しく見てもらいつつも、山火事についての情報も知ってほしい
・慣れない撮影だったが、協力して頑張ったので見てほしい

チャンネル登録をして、動画をお待ちください！

クローズアップ社会研究会

略して
クロ社研！

クロ社研とは、顧問の安富教授局長の服部仁美をはじめとする政治や防災といった時事問題について「なぜ？」という疑問を持ち研究を行い、世に発信していく団体です。
今回は「山火事」というテーマにクローズアップして調査を行いました！

結果の比較をチョイ見せ！

高御座山山火事	加古川山林火災
• 鷹巣山から発火 • 焼損面積：117.3ha • ヤマモモが防火林として植えられている • 緑が戻りつつある • 山火事予防の看板が増設	• 山林から発火 • 焼損面積：13.494ha • 見える範囲では対策は確認できず • 木が当時のまま • 私有地のためボランティアが入りにくい

なぜ山火事にしたのか？

- 身近で起こっているのに注目されていないため
- 地球温暖化など様々な問題に発展する可能性があるため

私たちの投稿動画

調査の様子を写した動画、山火事の原因ランキングを紹介する動画などを投稿しています。また、NG集も投稿しています。気になる方は左下にあるYouTubeのQRコードからどうぞ！

調査の流れ

事前調査
→ 現地調査・比較
→ 当時の天候の調査
→ 動画により「報せる」

コラム

投稿動画の状況(現時点)

合計視聴者数：90回
合計高評価数：８いいね
チャンネル登録者数：9人

感想・第三者の意見(コメント)

山火事について楽しく学べた！

見ているほうも面白い！

○神戸学院大学４　では、今からクローズアップ社会研究会の最終発表を行っていきたいと思います。発表者は私、西山　潤と、

○神戸学院大学５　藤原　勝利と、

○神戸学院大学６　加賀山　潤です。

○神戸学院大学４　よろしくお願いいたします。

これまで私たちは、キックオフ会では山火事がテーマであるということを発表し、中間発表では実際に聞いて回っていき、２つの山火事について企画をいたしました。また、ショート動画のほうも作成し、そこも行いました。

今回の最終発表では、山火事の発生原因と予防方法を中心に発表していきたいと思います。

私たちはハワイの山火事や、カナダの山火事が、気候変動が原因であることから、気候変動が原因、日本の山火事においても気候変動が原因してるのではないかなと考えました。

そこで、林野庁ホームページで調べてみたところ、たき火、火入れ、放火がトップ３を占めていました。ちなみに火入れというのは簡単に言うと野焼きのうち、山の近くでやるものと考えていただければイメージしやすいと思います。たき火が31.5%、火入れが18.4%、放火が7.9%を占めており、このトップ３だけでも約６割占めているということが、このグラフから分かると思います。

こちらは出火原因が明確なものもいっぱいやっているので、もしかしたら不明確なものの中では、気候変動が原因しているものもあると思います。それでも、たき火、火入れといった人為的なものが約過半数を占めているので、山火事の原因は圧倒的に人為的要因だということが、さっきの図からも分かると思います。

そこで日本の山火事の発生件数なんですけど、一番最近の発生ケースでして、いずれも1,000件を超えているということが分かると思います。

○神戸学院大学５　人為的要因によって起きているこの山火事なんですけど、その予防法を神戸市消防局予防課にお伺いしました。

まず私たちにできることとして、事前に山火事の危険性であったり、この原因、人為的に起きているということを知ること、あとはたき火やバーベキューとかキャンプをされる際に火を使うときは、その場から離れないようにすることであったり、次に離れるときには、完全に火が消えたということを確認してから離れるようにする。後は火遊びをしないということです。

それに加えて注意すべき天候として、空気が乾燥してるとき、特にこれからの時期っていうのが一番危ないんですけど、１月から５月の間っていうのは、この日本で起きている山火事の７割が集中してるんです。後は強風が吹いてるときですね。特にこれ糸魚川の大火とか、関東大震災のときの帝都とかがそうだったと思うんですけど、やっぱり強風が吹いてるときっていうのは、１つの場所で出た火というのが、どんどん、どんどん、飛び火してしまうので、そういった危険性もあります。

もう１つ、消防局の航空機動隊にこの消防ヘリを活用した消火方法についてお伺いしました。この消火のときに、今回調査した高御位山も、後は加古川の山林火災も、両方でこの消防ヘリが使われました。

まず前提条件として、近くに池であったり、ダムであったり水をくめる場所があることが必須になってきます。この黄色い部分の、ヘリの下についてるこのバケツで水をすくって、現場まで持っていってまくという感じなんですけど、この水、出る量１回で大体最大600Ｌ、お風呂３杯分になります。お風呂３倍の水が一気に山に、放たれるんですけど、それでも足りません。例えば、今回の高御位山の山火事であれば、燃えてから完全に火が消えるまで５日かかりました。広がるのが収まるまでにも30時間以上かかっています。そうなると、この１機だけでは足りないので、２機目を要請するか、一度、神戸空港に基地があるのでそこに戻って、もう１回現場に帰ってきて作業を繰り返すっていったこともしているそうです。

あと、そのヘリなんですけど、大雨であったり雪のとき、後は強風とか雷といった自然の条件として悪いときには、機動隊のほうで判断して、出動しないというのを決めることもあるようです。それの出動しない条件としては、神戸空港もそうなんですけど、現場であったりその途中であったり、そういったところを全

部見て、航空機動隊のほうで出動しないという判断を行うそうです。

○神戸学院大学６　ここからは、山火事について報せるということで、我々の視点がどういうふうに山火事について報せてきたかというのを発表していきます。

まず使ったのは、YouTube という動画配信サービスで、最初にはショート動画を投稿しました。投稿したのは10月の27日で、動画投稿の感想ですが、編集が大変でしたが、興味を引きやすいように動画作りを心がけました。感想として、フィールドワークをしている様子が面白かった、山火事について知ることができた、など好評をいただいております。

本編動画は、現在は１本目の「高御位山」については公開していますが、３、４本をアップロードしていく予定です。ほかの動画は順次統合していきます。

動画制作への思いとして、楽しく見てもらいつつも、山火事についての情報も知ってほしい、慣れない撮影だったが、協力して頑張ったので見てほしいと思っています。

左下のＱＲコードからクローズアップ社会研究会のチャンネルの方に飛べるので、チャンネル登録をしてほしいです、お願いします。

動画制作で大変だったこととして、撮影に慣れていないメンバーが多く、そのため何度も撮り直し、よいものを撮ろうと全員で一致団結して頑張りました。動画編集ができるメンバーが１人しかいないので、編集をその人に負担をかけてしまって、それが問題になったっていうのは、２点挙げられます。また、動画のテイストを、気軽に見てもらうために楽しい動画にするのか、それともしっかり山火事について知ってもらうために、真面目な動画にするっていう、２つの方向性をどうしようかっていうのを話し合ったんですけど、今回、より多くの人に見てもらえるようにするためには、気軽に見てもらえる楽しい動画にしようっていう方向性に決めました。

「報せる」ための今後の課題として、今回は YouTube という１つの動画配信サービスにしてしまったため、まだちょっとシュッと再生回数がそこまで伸びていないというのもあるので、インスタグラムなど他の媒体も使って、いろんな方法で知ってもらえるように情報発信していくっていうのが１つ。また、今回動画投稿がちょっとゆっくりになってしまったので、視聴回数を増やすために、もうちょっと早く出したりするとか、さっき言ったように、インスタグラム、Ｘなどを使って、動画について、他のところに知らせていけるようにしていきたいと考えております。

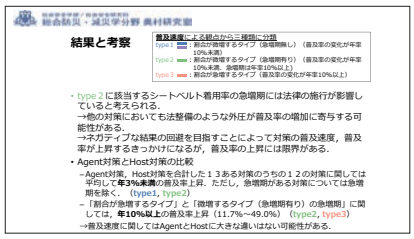
まとめとなります。フィールドワークで火災から時が経っても被害が残っている山火事の脅威を知った、これは高御位山の山林火災について、まだ地肌が残って見えているっていう状況で、再生が結構時間かかるっていうのは、よく分かるっていうことから山火事の脅威を知りました。

山火事はなじみがない災害って思われがちなんですが、バーベキューやキャンプするっていうときにも、山火事の発生する要因となってしまうたき火とかそういうのがあるわけですので、そういった原因とか防止の方法を知っておいてもらうことで、少しでも山火事を減らすってことができるのではないかと思います。

山火事の発生原因として、日本では人為的なものが多いと、先ほど述べたのですが、やっぱり海外だと、気象状況の変化によって山火事が発生するということが多く、この一端として、地球温暖化が関わっている可能性があるということなので、地球温暖化を少しでも進行を遅らせるというためにも、日本で山火事の件数を１つでも減らす、そういうことを「報せる」ことが大切だと感じました。クロ社研として今後も山火事について発信していきたいと思います。

ご清聴ありがとうございました。

関西大学
社会安全学部 奥村研究室



Graduate School and Faculty of Societal Safety Sciences　fSS

阪神・淡路大震災の教訓は生かされているのか？
防災対策の普及速度と普及率

藤嶋　幸一　Koichi Fujishima / 関西大学社会安全学部３年

背景・目的

阪神・淡路大震災などの大規模地震**災害を経験する度**に，家具・家電等の**固定率**は**上昇**してきたが，近年，**その特徴が見られなくなった（図1）**．安全安心のための対策が社会に浸透する特徴として，各種対策の**普及速度**（対策が浸透する速さ）と**普及率**（対策が浸透する割合）に関するデータを収集し，分析する．事例として，家具・家電等の固定率に注目し，他の対策との比較から，その**普及速度**や**普及率**にどのような意味があるのかを明らかにする．

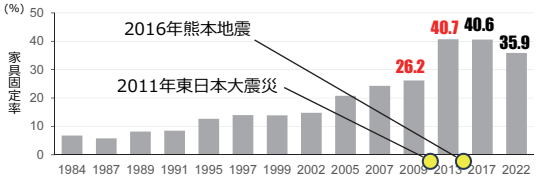


図１　家具固定率の推移　（出典：内閣府「防災に関する特別世論調査」）

手法

階層構造を有する災害分類を用いて，**異なる危機事象への各種対策の分析**を実施する．

＜使用するデータ＞

表1　使用する評価指標一覧

		対策名	データの期間	出典
道路交通事故	Agent	生産台数に占めるペダル踏み間違い急発進抑制装置の整備率	2011~2019	内閣府
	Host	後部座席シートベルトの着用率(一般道)	2005~2021	警察庁
		後部座席シートベルトの着用率(高速道)	2005~2021	警察庁
		二輪利用者の胸部プロテクター着用率	2016~2022	警視庁
		後期高齢者の運転免許自主返納率	2013~2022	警察庁
地震の揺れ	Agent	家具固定率	1984~2022	内閣府
		防災拠点となる公共施設等の耐震率	2002~2022	消防庁
		防災拠点となる公共施設等の耐震診断率	2012~2022	消防庁
		既存建築物における外壁材の落下防止対策実施率	2006~2016	国交省
		自分の家の耐震性を高くしている割合	1987~2007	内閣府
	Host	避難する場所を決めている割合	1984~2022	内閣府
		携帯ラジオ，懐中電灯，医薬品などを準備している割合	1987~2013	内閣府
		食料や飲料水を準備している割合	1987~2017	内閣府

＜対象とする危機事象＞

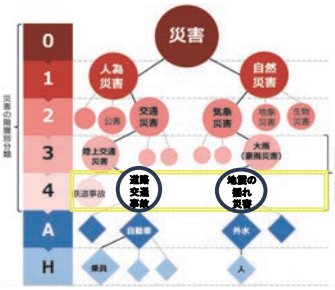


図2　階層構造を有する災害分類．石田（2022）に加筆．

＜AgentとHost＞

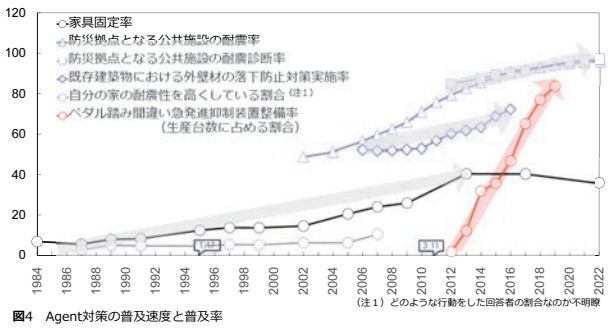
A階層：事故・災害における傷害の作用因子（Agent）の名称

H階層：事故・災害によって死傷の可能性がある人物（Host）の名称

図3　HostとAgentの接触の定義．（出典）石田（2022）

結果

type1 ：割合が微増するタイプ（急増期無し）（普及率の変化が年率10%未満）
type2 ：割合が微増するタイプ（急増期有り）（普及率の変化が年率10%未満．急増期は年率10%以上）
type3 ：割合が急増するタイプ（普及率の変化が年率10%以上）



（注１）どのような行動をした回答者の割合なのか不明瞭

図4　Agent対策の普及速度と普及率

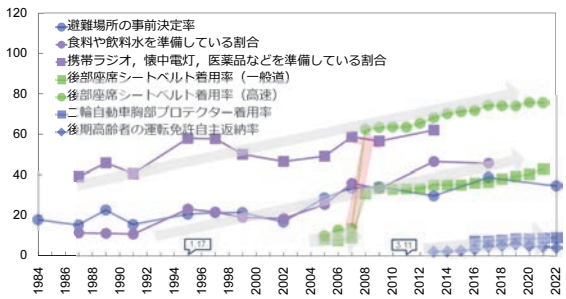


図5　Host対策の普及速度と普及率

普及速度と普及率 ①Agent対策の特徴

- 「ペダル踏み間違い・・・」は，唯一，割合が急増するタイプ．
- 他の５つの対策は，割合が微増するタイプ（急増期無し）．「家具固定率」を含む．

普及速度と普及率 ②Host対策の特徴

- 「後部座席シート・・・」は，割合が微増するタイプ（急増期有り）
  → 法整備が普及率に大きく影響した
- 他の６つの対策は，割合が微増するタイプ（急増期無し）

③Agent対策とHost対策の比較

- Host対策，Agent対策の13ある対策のうちの12つは平均して**年3%未満**の普及率上昇．ただし，急増期がある対策については急増期を除く．（**type1, type2**）
- 「割合が急増するタイプ」と「微増するタイプ（急増期有り）の急増期」に関しては，**年10%以上**の普及率上昇（11.7%～49.0%）（**type2, type3**）

→普及速度に関してはAgentとHostに大差ない可能性がある．

結論

1. 「家具固定」は，道路交通事故対策や地震の揺れ災害に見られる多くの取り組みと同様に，**年率3%未満**で普及率が上昇するタイプに属することが分かった．
2. 「家具固定」は，阪神・淡路大震災以降，災害発生直後に普及率が大きく増加する特徴が見られた．とりわけ，東日本大震災前後の伸び率が最も大きく，**年率4.8%**であった．しかしながら，法整備によって一時的な普及率の急増が見られる「後部座席シートベルト着用」や「ペダル踏み間違い急発進抑制装置整備」ほどの急増ではなかった．
3. **年率10%**を基準にして，それを上回ると急増期として分析したが，今後さらに多くの対策を合わせて検討していく中でその数値の意味について考察する必要がある．

社会安全学部 / 社会安全研究科
総合防災・減災学分野 奥村研究室

○**関西大学**　関西大学の社会安全学部の奥村研究室の藤嶋です。

研究の紹介をする、研究の発表をする前に、チラシの裏を御覧ください。阪神・淡路大震災では、建物の耐震化や家具転倒防止対策や災害関連死対策など、被災地による防災の取組の重要性が広く社会に認知されました。私たちは、それらの取組の普及速度や普及率に注目して、当時の教訓は生かされているのかを検証しています。

研究発表について今からお話します。お願いします。

背景と目的です。阪神・淡路大震災などの大規模地震災害を経験するたびに、家具・家電等の固定率は上昇してきました。2011年の東日本大震災では14%ほど上昇しました。これは災害の上昇になってます。

しかし2016年の熊本地震以降は、地震が起こるたびに、家具・家電等の固定率が上昇するという特徴が見られなくなりました。自然災害や交通事故に対する安全安心のための対策は数多くありますが、それらにも同じ特徴があるのでしょうか。そこで、安全安心のための対策が社会に浸透する特徴として、各種対策が浸透する速さ、起きる速度と浸透する割合、普及率に関するデータを収集し、分析します。

さらに事例として、家具・家電等の固定術に注目し、ほかの対策との比較から、その普及速度や普及率にどのような意味があるのかを明らかにします。対象とする危機事象は道路の交通事故と地震の揺れ災害です。

同じレベルで異なる危機事象を比較する必要があるため、この図を使用しました。これらの対策が何に対して実施される対策かという観点で、A階層とH階層に分類します。A階層は傷害をもたらすその災害での作用因子 Agent と、H階層はその災害によって事象の可能性がある人物 Host です。こちらの表にあるように、人と車が衝突する交通事故の場合、歩行者が Host で、自動車が Agent になります。自動車同士が事故をする場合、自動車に乗っている人が Host であり、自動車が Agent になります。結局この道路交通事故と地震の揺れ災害への対策に注目しました。この表は、災害の種類と何に対して実施される対策なのかという観点から整理したものです。こちらに記載している対策普及率に関する統計データを使用して、各種対策の普及率の経年変化を比較します。

ちなみに、何に対しての対策か、例えばシートベルト着用は Host への対策であり、Host 自身のことが必要です。また、自動ブレーキは Agent への対策であり、Host の行動や意識の高さを必要としません。しかし、家具固定は Agent に対して施す対策ですが、事象の可能性がある Host の行動が必要となります。このように、*Agent* に対して施す対策であっても、*Host* の行動が必要となる場合もあります。

各種対策と、普及速度と普及率が分かるように示したグラフです。こちらは Agent 対策の普及速度と普及率です。普及速度に関して３つのタイプに分けました。

type1 の青色蛍光の色の線は、毎年割合が微増するタイプです。

type2 の緑色の線は、毎年割合が微増するタイプですが、一時的に急増するタイプです。こちらの Agent 対策には、その緑色に、type2 のものはありませんでした。

type3 の赤色線はポンと症例が急増するタイプです。

二重線は道路交通事故、実線は地震による災害への対策を示しています。

こちらの赤色のペダル踏み間違い急発進抑制装置整備率は、生産台数に占める割合が減っているということに注意が必要です。

他の５つの対策は割合の微増するタイプです。家具固定率に焦点を置いているので、黒線にして強調しています。こちらも割合が急増するタイプに含まれます。

また、自分の家の耐震性を強くしている割合という評価指標がありますが、どのような行動をした回答者の割合なのか不明瞭っていうことで注意が必要です。新耐震の家屋に住んでいるので、耐震性を高くしていると回答した可能性もありますし、家屋の耐震の診断を受けた経験があるので、自分の家の耐震性を評価していると回答したというような可能性も考えられます。

どのような理由で、回答者が耐震性を高くしていると答えたのが、はっきりとしていないことには注意が必要かなと思います。

こちらは地震対策の普及速度と普及率です。前回のスライドと同じく、普及速度に関して色分けをして、線のタイプで危機事象の区別をしています。一般道、高速とともに、後部座席シートベルト着用率は割合が微増するタイプですが、こちらのように急増期があるタイプです。こちらは道路交通法の法改正後に、普及率が大きく上昇しているので、法整備が割合に大きく影響したと考えられます。

他の６つの対策は、割合が微増するタイプです。急増期がない割合が微増するタイプです。

結果と考察です。type2 に分類される後部座席シートベルト着用率は、法律の施行が影響していると考えられます。

このことから、ほかの対策においても、法整備のような政策が、施策が、普及率の増加に寄与する可能性があります。このタイプでは、ネガティブな結果の回避を目指し、普及速度と普及率が上昇するきっかけになりますが、普及率の広がりには限界があります。

Agent 対策と発足の対策とを比較してみると、Agent 対策、Host 対策を合計した13ある対策のうち12の対策に関しては、平均して年３％未満の普及率の上昇でした。ただし、type2 のような急増期がある対策については、急増期を除きます。

type1 と急増期を除いた type2 に該当する12の対策が、割合が微増するタイプに含まれました。割合が急増するタイプと微増するタイプですが、急増期があるときの急増期に関しては、年10％以上の普及率の上昇が見られました。これらの対策の普及率は、１年で11.7％から49％の上昇が見られました。

急増期間のタイプ増加と type3 に該当する３つの対策は、割合が急増するタイプ、急増期があるタイプでした。したがって、Agent 対策と Host 対策ともに、割合が微増するタイプに該当するものが多く、復旧速度に関しては、これら２つの対策に大きな違いはない可能性があります。

結論です。この「家具固定」は、道路交通事故対策や地震の揺れ災害に見られる多くの取組と同様に、年率３％未満で普及率が上昇するタイプに属することが分かりました。

「家具固定」は、阪神・淡路大地震以降、災害発生直後に普及率が大きく上昇する特徴が見られていました。とりわけ、東日本大震災前後の伸び率が最も大きく、2009年では26.2％だった家具固定率低率が、2013年に40.7％になりました。４年間で14.5％上昇しました。しかしながら、法整備によって一時的な普及率の急増が見られた「後部座席シートベルト着用」や、「ペダル踏み間違い急発進抑制装置整備」ほどの急増ではありませんでした。

今後は、「家具固定」の普及速度や普及率に、どのような特徴があるのかを分析を進めるために、普及速度に関してだけではなく、ほかの対策の普及率の特徴についても、より深く分析を進めたいです。

また今回は、年率10％を基準として、それを上回ると急増期として分析しましたが、多くの対策も合わせて検討していく上で、その数値の意味について考察する必要があります。

これで関西大学社会安全学部の発表を終わります。ありがとうございました

兵庫県立大学
防災リーダー教育プログラムチーム

私たちが考える「報せる」とは

体験を通じて、より多くの後世代に「自分事」として認識してもらう。

・座学はもちろん、防災カフェや体験ゲームを通して常に被災時を想定しやすい雰囲気づくりが重要

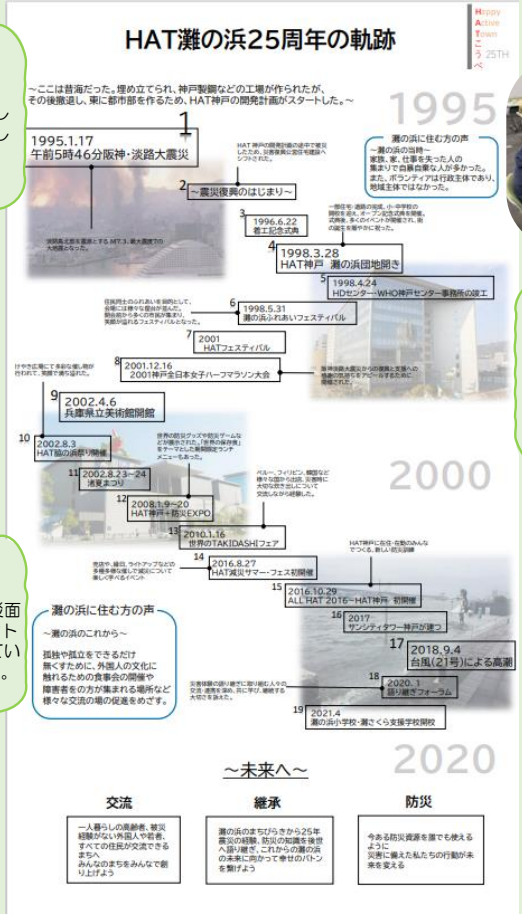
兵庫県立大学
副専攻　防災リーダー教育プログラム

年表作成活動の目的
阪神・淡路大震災でできたHAT神戸なぎさ地区の復興の歩みから教訓を学ぶ

教訓
・今ある防災資源を誰でも使えるようにすることが重要
・一人暮らしの高齢者や被災経験のない外国人、若者などすべての住民が交流できるまちづくりを

私たちが考える「報せる」とは
体験を通じて、より多くの後世代に「自分事」として認識してもらうこと。
座学はもちろん、防災カフェや体験ゲームを通して
常に被災時を想定しやすい雰囲気づくりが重要。

なぎさ地区年表作成



HAT減災サマーフェス
防災グッズ集めカードゲーム・非常持ち出し袋の重さ体験をしてもらった。ゲームを通して親子で備えについて話してもらえた。

あまおだ減災フェス
防災脱出ゲームを主催し、ファッションショーにも参加した。ブースでの防災知識の伝え方について、「私もイベントで使いたい」等のお誉めの声もいただいた。
役割分担や集客など、運営が難しく苦労した。

立花西小学校出前防災講座
アニメキャラクターの家の写真の中から防災面で良いところと悪いところを探す防災ポイント探しをしてもらった。 積極的に探してくれていたので各家庭での防災に活かしてもらえそう。

○兵庫県立大学１　それでは、これから兵庫県立大学防災リーダー教育プログラムの発表を始めます。発表を担当するのは看護学部の吉田と、

○兵庫県立大学２　環境人間学部の佐藤です。よろしくお願いします。

○兵庫県立大学１　私たち防災リーダー教育プログラムは、防災を軸とした様々な活動を通して社会の中でリーダーとなる人物の育成を目指すということを軸に、この１年間、防災カフェへの参加や防災フェスティバルへの出店、出前授業などを行ってきました。

○兵庫県立大学２　ここからは細かい活動の内容について紹介していきます。

まず初めに防災サマーフェスへの参加です。私達のブースでは防災グッズ集めと題しまして、いざというときのための備えをテーマに、来場者の方に状況に応じた非常持ち出し袋の中身を選んでもらうという、カードゲームを体験してもらいました。

ルールとしては、ランダムで選んでもらったシチュエーションに合わせて、その状況で被災した際に必須のグッズを選んで、この下に置いてあるテーブルの中から選んでもらうという形です。例としては、普通の何も特別でない一般の家庭の方でしたら笛とか、ティッシュとか、懐中電灯とか。もしペットがいるご家庭であれば、ペット用のリードとか、ご飯とか、そういったものを選んでもらうことになります。

また、非常持ち出し袋の重さを体験できるブースも併設しました。当日は、グッズ選びでお子さんとかお母さんとか、かなり家族全体で迷いながらも楽しんでいただけた方が多かったように感じます。

このブースを準備する過程で、私たちは非常持ち出し袋について何が重要か、また来場者の意識はどうか、どうすれば備えの重要性を感じてもらえるか、ということを考えることができました。参加者だけでなく自分たちの防災意識を深められて、伝えることについて考える機会になったと思います。

続いて２つ目の取組は、ＨＡＴ神戸なぎさ地区25周年の振り返りと年表作成です。

この活動が今年度私たちのメインの取組で、阪神・淡路大震災でできたまちの復興の歩みから新たな教訓を得ることを目的として、年表を作成しました。

この年表作成に当たって、なぎさ地区や灘浜地区をよく知る方に、お話を伺いました。灘浜地区まちづくり協議会代表の方や、人と防災未来センターの資料室の資料をお借りしたり、近くにある敏馬神社の看板や資料を活用したりして、25周年の取組をまとめました。

まとめた、調べた内容を少し説明すると、なぎさ地区は阪神・淡路大震災後にできたまちで、復興公営住宅やＵＲ分譲マンションで構成されます。

まち開きから25周年で新たにできた課題としては、近年は新しく入ってこられた方が多く、コミュニティが希薄になったり、高齢化が進んで防災文化の次世代への継承が課題となっております。

また、今行われている取組として、地域の方が集まれるまちづくり、場所づくりや防災イベントの開催が挙げられます。

そして、調べたことを目標に年表を作成しました。今までの歴史だけではなく、現代やこの先の灘浜地区の未来までを、少し想像した未来像まで書く年表となっております。普通に年表の箇条書きの表だと、あまり面白くないかなと感じたので、すごろくのような

レイアウトにすることで、見やすくなっております。

○**兵庫県立大学１**　ここからは、中間発表の際にいただいた助言などを踏まえて、修正した点についてお話していきたいと思います。

修正してきたテーマに伴って、１つ目は地域の方の教訓や今後の展望を具体的に取り入れること。２つ目が年表のフォントをより見やすく修正することです。

住民の方のお話では、震災当時は家族や家、仕事を失って、自暴自棄な人が多くて、それでトラブルが多かったという話や、ボランティアは行政主体で行われていて、地域主体ではなかったんだよっていうようなお話などをお聞きしました。

地域の方のお話を聞いていく中で、今ある課題に対して、こうしていきたいなというようにお話してくださることが多くって、そういったお話とか、灘の浜を私達が知っていく中で、感じたことなどを基に大きく２つの教訓を挙げたんですけど、１つ目が今ある防災資源を誰でも使えるようにしていくこと、２つ目が１人暮らしの高齢者や被災経験のない外国人、若者など全ての住民が交流できるまちづくりをしていくということです。

この１つ目の、今ある防災資源を誰でも使えるようにっていうのは、ここの地域はすごく防災資源とかいっぱいあるんですけど、地域の方のお話の中で、その防災資源を使ってみようと思ったときに、その使い方の説明書がどこにあるのか分からなくて１回失敗したっていうようなお話を聞いたりしたので、誰が入ってもすぐに使い方が分かるようにだったりとか、定期的に地域みんなで使っていくっていうことが大切だなというふうに感じました。

最後に私たちが考える「報せる」についてなんですが、体験を通じてより多くの世代に「自分ごと」として認識してもらうことが大切だと考えます。座学もとても大事だとは思うんですけど、防災にあまり関心のない方だったり、幼い子供の方だったりすると、座学ってなると少し難しかったり、関心がない方については、頭に入ってこないという方も多いと思います。

ですが、先ほど話したサマーフェスでゲームをしたときなどは、小さいお子さんもすごい興味を持って、集中してやってくださったり、家族の中でこれはいるんじゃないかっていうふうに、防災についても話し合いのきっかけになってるように感じたので、体験をすることで、自分の家だったらこれやらなきゃいけないなっていうふうに考えてくださる方もいて、ただ知識を知ってもらうだけじゃなくて、体験を通して被災時

を想定しやすい雰囲気づくりが重要だと思います。

また教訓についても、どうしてその教訓になったのかっていう出来事について知ることで、よりその教訓について理解することができると思うので、その年表作成からは、その出来事について、知ってほしい情報を分かりやすく伝えるっていうことが「報せる」ことにおいて大切だと思いました。

完成した年表については、展示スペースにありますので、ぜひ御覧ください。

ご清聴ありがとうございました。

パネルディスカッション
テーマ：これからの「報せる」は？

【コーディネーター】
●明石工業高等専門学校 准教授　本塚　智貴さん
●人と防災未来センター研究部 研究調査員　塩津　達哉さん

【グラフィックファシリテーター】
●大阪防災プロジェクト 共同代表　多田　裕亮さん
●山越　香恋さん

【パネリスト】
●兵庫県立舞子高等学校　義村理央菜さん
●滋賀県立彦根東高等学校　伊東　大舞さん
●兵庫県立尼崎小田高等学校　花内綺梨花さん
●神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ　服部　仁美さん
●関西大学 社会安全学部 奥村研究室　藤嶋　幸一さん

○司会　お待たせいたしました。それではパネルディスカッションを始めます。今回のパネルディスカッションのテーマは、「これからの『報せる』は？」です。

「報せる」には一方通行のイメージがありますが、現在は「双方向」や「つながる」という観点も重要となっています。今回は、その方法論にとどまらず、モノの持つ力といった多様な視点から未災者が未災者に「報せる」ことのこれから、について考えていきます。

この時間は、できるだけ会場の皆さんでディスカッションできる活発な意見交換の場づくりを目標にしたいと思います。

出演者を御紹介いたします。

向かって左から、コーディネーターを担当していただきます国立明石工業高等専門学校准教授・本塚智貴さんと、人と防災未来センター研究調査員・塩津達哉さんです。

続きまして、パネリストとして、兵庫県立舞子高等学校の義村理央菜さん、滋賀県立彦根東高等学校の伊東大舞さん、兵庫県立尼崎小田高等学校の花内綺梨花さん、神戸学院大学現代社会学部社会防災学科安富ゼミの服部仁美さん、関西大学社会安全学部奥村研究室の藤嶋幸一さんです。

そのほか、本日御参加いただいている学生さんや関係者の皆様も、意見交換にぜひご参加ください。

ここからの進行は、コーディネーターの本塚さんと塩津さんにお願いしております。

それでは、よろしくお願いします。

○本塚コーディネーター　それでは、よろしくお願いします。

大体１時間ぐらいの時間となります。できれば会場の人にも積極的に参加していただきたいなと。言葉を発するのはすごく緊張すると思いますので、いくつか挙手制で、こっちがどちらかに手を挙げてくださいとかそういった形で振りたいと思いますので、ご参加よろしくお願いします。

それでは皆さん、壇上の皆さんがすごく緊張されてると思いますし、いろんな質問するとすごく不安だと思いますので、ちょっとまた自己紹介も兼ねまして、それぞれの団体のほうのキャッチフレーズ、意識してるようなことと、それに対して個人的に自分がその活動するときに意識していることについて少し、声を出す練習として発表していただきたいと思います。

順番にお願いいたします。

○義村さん　舞子高校の義村理央菜です。本日はよろしくお願いします。

私たちがテーマとしていることは、今年度は災害の教訓を生かした活動をしようということで、昨年度は「未災者と未災者をつなぐ架け橋となろう」という名目で活動してきて、それで先生の被災体験のインタビューを行っていく中で、様々な学んだことなどがあったため、それを生かすために、災害を生かした活動ができればなと思って、今年度災害を生かした活動をしようというテーマになりました。

そして、自分で気をつけていることですけど、やっぱり防災読本とか、インタビューをさせていただいているんですけど、その防災読本やインタビューする中で、防災に興味がない人にも冊子を読んでいただけるような活動をしたいなと思い活動しています。例えば冊子は、雰囲気を明るくした色をつけるとか、あと、読んでもらえるような防災読本であったら、コラムのようなページを入れたり、紙食器の項目では、紙食器の作り方を載せるだけではなくて、使ってみた感想なども入れるようにしています。お願いいたします。

○本塚コーディネーター　はい、ありがとうございます。

○伊東さん　彦根東高校の伊東大舞です。よろしくお願

いします。

新聞部なので、部活のモットーは発表でもさせていただいたんですけど、「やりたいことは何でもやる」ってことがモットーになっています。それを基にして挑戦したり企画化するのを、昔はなんか限界集落に行ったりとか、マラリアの取材をしたりとか、いろんなことをされてきたみたいですけども、だから私個人として、意識していることなんですけども、新聞って１人ではできないことなので、みんなで作るっていうことを前提に、企画の案を出す、口に出すことを、頭に置きながら発言するようにはしています。

○本塚コーディネーター　はい、ありがとうございます。次、お願いします。

○花内さん　兵庫県尼崎小田高等学校の花内です。よろしくお願いします。

看護医療・健康類型っていう類型で活動しているんですけど、その中で長年掲げられてきたテーマが、地域コミュニティ関係の、顔の見える関係づくりっていうものなんですけど、今年度はその中で、さっきも紹介したように、高齢者を支える仕組みを強固にするために、災害食レシピの作成と、フレイル予防体操の開発を行って、あと、発達障害を持つ方は、特に避難時に生きづらさを抱えておられると思うので、その理解促進のためにっていうのをテーマとしてやってきました。その中で、個人として意識したことは、全てに共通していることなんですけど、１年前まで、今年が主に活動してきた年なので、１年前の自分だったら知らなかったこととか、例えば発達障害の特性を１年間で学んできたので、知る前の自分の気持ちとかを忘れないように、初心に帰ってというか、知らない状態で、なぜこういう特性があるのかとか、なぜこういう行動をするのかっていうのを、伝える側として受け止める人がこう思うんだろうなっていうのを、１年前の自分と比べながら作成したのが、意識したことことかなと思います。

○本塚コーディネーター　ありがとうございます。それでは次、お願いします。

○服部さん　神戸学院大学現代社会学部社会防災学科安富ゼミの服部仁美と申します、よろしくお願いいたします。

私たちのゼミはですね、基本的にこのメモアク以外、結構個人バラバラで、卒論に向けた活動などをしていることがメインなんですけど、その中でも安富先生のゼミに入ってるということで、共通していることは、やっぱり災害情報やそれ以外に情報をちゃんと入手するっていうことを主に大事にしています。それは安富先生の授業でも、何度も教えられていることで、私たちは、例えば、ニュースを見たりとか、携帯電話やSNS、災害や動画の情報を入手したりと、そういったことをするように心がけております。私個人といたしましても、朝起きて毎日ニュースを見たり、あとどんなに遅刻しそうになってもニュース見たりしてたり、学校に向かう途中に、今日の SNS とかニュースをチェックしたりと、毎日様々な情報に触れることを個人的に目標っていうよりは習慣となって、そんな感じでやっています。今日はよろしくお願いいたします。

○本塚コーディネーター　ありがとうございます。次、お願いします。

○藤嶋さん　関西大学社会安全学部の藤嶋です。お願いします。

キャッチコピーと言えるほどのキャッチコピーは、正直あんまりないと私は思ってるんですけど、よく言われるのが、防災に携わる人以外でも、その防災に関わっていくっていうことの大事さはよく耳にします。防災に関わる人たちだけで防災をすると、やっぱり限界があるというか、その限界が見えてしまうので、限界があると思うんで、防災に直接関わりがないような業界の人たちも防災に関わっていくことの大切さっていうのは、よく耳にします。それについて意識していることっていうのはちょっと難しいんですけど、私は奥村研究室に所属しているんですけど、奥村研究室に限らず、社会安全学部は、文系と理系が融合してるんですよね。融合してるので、いろんなバックグラウンドを持つ人たちがいるので、それを強みに何か新しいことができたらなっていうのは意識してますかね。以上です。お願いします。

○本塚コーディネーター　はい、ありがとうございます。

こういった目的意識の違うグループと、さらにその中でも意識を持ったメンバーで、今日は送っていきたいと思います。

今回はテーマが「報せる」なんですが、実は2022年

が「聴く」、2023年が「創る」、そして2024年が「報せる」といって、この３つのシリーズもので行っておりまして、特に今回はそういう「報せる」っていう手法であったり、活動に取り組まれているチームの皆さんに、壇上に上がっていただいております。

少し今日の発表について、内容について私、掘り下げていきたいと思うんですけど、聞きたいことはたくさんあるんですが、一番初めにちょっと塩津さんのほうから１つ質問を。

○塩津コーディネーター　ちょっとだけお聞きしたいんですけれども、今回のテーマ「報せる」というところで、いろんな人、知る、知りたい内容っていろんな層によって違うと思うんですね。男性とか女性とか、年齢とか、あと普段ゲームする人とかしない層とかあると思います。そういった層に、活動するときに、何か工夫してるところとか、もしあったら、もしくはこの内容をやったときに、結構受けがよかったなとか、いい反応が返ってきたなっていう活動内容があったら、教えていただきたいなと思いますけれども。

○本塚コーディネーター　全体への質問、それとも特定の誰か。全部。

○塩津コーディネーター　全体です。

○本塚コーディネーター　全員です。全員順番に伺って。ずっと一番だと不安だと思いますんで、逆方向で。順番。

会場のほうで、私ぜひ今の質問に対して答えたいということがありましたが、元気よく、挙手した上で立ち上がっておいてください。当てやすいので、お願いいたします。

○藤嶋さん　去年もそうだったので、多分そう来るかなと思ってたんですけど、何も考えてないです。ちょっと時間をください。お願いします。

○服部さん　急に一番になって困惑してます。

○塩津コーディネーター　工夫してる点とか、受けがよかった点とか、特にメモリアルアクションでもいいですし、活動の中でもいいですし、逆にインタビューの中で工夫してるみたいな。

○服部さん　私たち今回、岩手県岩泉町のほうに訪問したってお話を先ほどさせていただいたんですけど、個人的なことは初めて被災者の方にお話を聞くっていうのがありまして、実際に大学の社会防災学科に入って、コロナ禍っていうこともあって災害派遣とかボランティアの経験が実はまだなくて、そういったこともあったので、被災者に対して話の聞き方について、安富先生に話させていただいて、相談したんですけど、何を言ったら失礼にならないのかとか、マイナスの印象ばっかりすると、それを伝えると、もしかしたら被災者の方は嫌な思いをして、今後話してくれなくなったりとか、そういった今後、研究の妨げっていうか、情報を仕入れるときの問題点となってしまうので、そういったことも考えながら、質問をどのようにするかっていうのを、事前に何度もゼミ生や安富先生と相談してやったっていうのが、工夫の１つです。

○塩津コーディネーター　ちなみに、工夫で皆さんにここで共有できる、こういうのをしておいたらいいよというのがあれば教えてください。

○服部さん　マイナスのことを言おうとしたら、それを言った後に必ずプラスのことを入れてワンクッション抑えるっていうのが、個人的なことに大事なことかなと思いました。

○塩津コーディネーター　なるほど。ありがとうございます。尼崎小田高校さん、お願いします。

○花内さん　今年度の内容の中だと、災害食レシピと運動の班で、私災害食のほうなので、私でいうと、この前回のとき、災害メモリアルアクションのほうでワークショップをさせていただいて、そのときに、教授の方たちにアドバイスをたくさんもらって、めっちゃ参考になる意見をたくさんいただいたんですけど、自分たち、生徒の中でやってるので、その固執した考えになっちゃって何か、固まった意見になることも多くて、劇のほうでもそうなんですけど、学んできた立場からすると、これは普通っていうことも、さっき言ったように１年前の自分なら全然知らなかったことだったりっていうのがあるので、そこの考え、いろんな視点から考えるっていうのを工夫したのと、手応えですけど、まだ病院のほうはしてないので、そっちは分からないんですけど、アドバイスをいただいたときに、私も伝え方について若い人に向けるには SNS とか有効だと思うんですけど、年配の方とかはあまり使い慣れ

てないのかなと思いますので、情報の格差みたいなの結構あると思うんですけど、そのアドバイスの中で、独居の方はどうするんですかみたいな意見をいただいて、確かにと思って、イベントに参加してくださる方も、興味がある方が来てくださってるので、あまり興味を持ってない方とかにはどう伝えたらいいんだろうというのをずっと考えてるんですけど、まだずっと方法を見つけられてなくて、やっぱりその独居、災害が起きたときに手を差し延べたり、自ら関わりに来てくれるには、高齢者の方とかにも報せていく必要があると思うので、そこをもうちょっと深く調べていけたらいいなと思っています。

○本塚コーディネーター　はい、ありがとうございます。続きまして彦根東さんお願いいたします。工夫していることとか、受けが良かったことでいいんですけど、新聞の記事で、防災関係のこの記事はすごく反響があったとか。

○伊東さん　新聞なので取材をよくするんですけど、相手の人にお話を聞くときに、時系列順にというか、例えば誰かが大会でいい結果だったら、そういうときは、結果どうでしたかみたいなとか、あのときどう思いましたっていうのと、で次の大会について今の状態はそんなふうにしていますかっていうのと、次の大会どこを目指しますかみたいな、そういう過去と今と未来のことを順番に追って、記事の内容もそうですけど、順を追ってやるようにしています。

○塩津コーディネーター　はい、ありがとうございます。舞子高校さんお願いいたします。

○義村さん　今年度、防災読本を作らせていただいて、それで防災読本に結構いろんな、シェイクアウトだったり、紙食器だったり、いろいろなものを載せているんですが、調べたことや学んだことだけを載せるのではなくて、舞子高校に即した形で載せるようにしています。例えば備蓄倉庫だったら、備蓄倉庫に何が入っているかっていうのは、舞子高校生でも分からない人って結構多いと思っていて、それを載せることによって、備蓄倉庫に何があって何がないのか、舞子高校生に簡単に分かるようにしています。

○塩津コーディネーター　はい、ありがとうございます。では、関西大学さん考えていただきましたか。

○藤嶋さん　発表スライドで Agent と Host の図があったと思います。それはいろんな動き方をし、あの図を作るのにまず本当に数時間、下手したら10数時間かかってるんですけど、できるだけ見やすくしようと思ってしたんで、それだけ時間がかかってるんですけど、あの図ではまずに普及速度でまず色分けをして区別をして、その次に危機事象の違いですね、地震による災害と道路交通事故ということを線で区別して示してて、その３つ目が対策の対象 Agent と Hostっていうことを、マーカーは色をつけるつけないで区別していってたりしてたんですけど、それの工夫がありましたね。以上です。ありがとうございます。

○本塚コーディネーター　はい、ありがとうございます。それぞれやっぱり伝えるっていう、報せるっていうときに、今回のテーマであるんですけど、双方向につながらない、一方的に発信するんじゃなくて、やっぱり相手のこと、誰に伝えたいのか、誰に知らせたいとか、そういったところが非常に重要になってくると思うので、発表の中でもあったんですけど、とはいえ、全員に伝える、報せるってすごく難しくて、特定の層とかに絞ったりしてるんですけど、じゃあ会場の方も手を挙げる練習をしたいと思いますが、皆さん自身でいいです、団体の方針とかもう無視していただいて、皆さん自身が何か取組、もしくは自分が何か知ったことを報せるっていうときに、全員に平等に報せるようなことを意識したいのか、それとも特定の人に特化した方が、自分は報せたいのかどちらかで、挙手をお願いいたします。

はい、それでは、全員に押しなべて伝わるようなことを特に意識して頑張りたいと思う方は挙手をお願いします。

ありがとうございます。大丈夫、当てないので大丈夫です。逆に特定の誰かに特化したことを意識したいというような方。

ありがとうございます。こういうふうに、何度か質問も交えながら行きたいと思います。皆さん、特に何か聞きたいことあったら、この場で新聞の記事にしてもらっても大丈夫です。

はい、ちょっと緊張がほぐれてきたかなと思います。

では、あまり思い出したくはないんですが、１月１日に能登半島の地震がありました。私も揺れは体験したんですが、皆さん自身は１月１日、どういったところで揺れを体験したのか、もし話せる範囲内で教えていただけますでしょうか。ちなみに塩津さんどこで体験しました。

○塩津コーディネーター　私は八尾で、自宅で体験しました。

○本塚コーディネーター　はい。逆方向から行きましょうか。

○義村さん　１月１日は、西宮にある祖母の家に帰っていて、それで祖母の家がマンションなんですけど、マンションの４階にあって、揺れたときゆっくりな揺れが長く続いて、それでテレビとかも見入っていて、本当に１月１日に地震って起きるんだなっていうか、いつ起きるか分からないんですけど、地震は。１月１日に来たっていうのが、とても驚いて、防災とか学んでいても怖いなって思いました。

○本塚コーディネーター　ありがとうございます。具体的なところ、隠すとこは隠していただいて大丈夫です。

○伊東さん　あの日は、風邪で寝込んでましたね。39度ぐらいあったので。自分が歪んでいるのか、地震の揺れなのか、自分の体がおかしくなって揺れてるのかが分からなくて、何かでも長いから、さすがにこれは自分の体そこまでおかしくはないのかなって。10分ぐらい続いたんですかね。

○本塚コーディネーター　はい、ありがとうございます。

○花内さん　私は夜にちょっとお鍋をする予定だったので、その食材を買いに家族で行ってたんですけど、車に乗っていたんで気づかなくて、テレビの音声で聞いて一回停まって、揺れてるなみたいな感じでそのまま帰りました。

○服部さん　同じく寝てましたの１人です。私は１月１日の日は、兵庫県の伊丹市にある祖父母の家にいて、祖父母の家でこたつの中で寝てました。お正月なんでそんな、ゆっくり寝てたんですけど、親に起こされたと思ったんです、最初は。揺すり起こされたと思って、起きたんですけど、親がそのときちょっと遠くにいて、あれって思ったら揺れてて、揺れが、こういう引っ張り式のひものついてる電気なんですけど、それがこう動いてたりとか、こたつの上のコーヒーが波打ってて、ああ揺れてるわってなってて、地震嫌いで本当大騒ぎしてたって感じですね。以上です。

○藤嶋さん　同じく体調が悪かったんですけど、確かパワーポイントかワードを開いて、何か作業をしてたと

思うんですけど、体調悪いので、熱が出てきたかなと思ったら、石川で地震が起こったっていうことを知ったっていう流れです。

○本塚コーディネーター　ありがとうございます。ちなみに今回、テーマが「報せる」なんですけど、津波の到来を報せるということでNHKのアナウンサーを中心に、非常に強い口調での呼びかけがありました。皆さんは普段は活動の中では、報せるっていうことをテーマにされてるんですけど、今回報された立場として、あの強い口調、今すごく賛否両論ありますが、先に会場の人と交えていきましょうか。

あの強い口調の呼びかけに対して、ちょっとそのやりすぎだろうって思った。もしくはもっと強い口調でも呼びかけるべきだと思ったの二択で行きたいと思いますが、やり過ぎだと思ったような方、いらっしゃいますか。

ありがとうございます。逆に、もっと強い口調でも良かったんじゃないかと思う方。

ありがとうございます。ちなみに皆さん自身はどう思われました。

○藤嶋さん　そうですね、そのときはNHKつけてなかったんで、正直聞いてはないんですけど、SNSで、私が見てる限りは賛のほうが多かったんですけど、むしろ賛否の否は見なかったんですけど、よかったと思います。対応としては。

○服部さん　私はさっき言ったこたつで寝てた部屋と、もう一個リビングのほうにテレビが２台あって、一個NHKで、一個どっかで見ててやってたんですけど、私個人的に強い口調とかの話で印象に残ってたのが、津波のときに津波の情報見てるじゃないですか。そのときにテレビを消して逃げてくださいっていう話があるんですけど、テレビを消さなくていいです、そのままでいいんで逃げてくださいって言って強い口調でアナウンスされてる方がいて、そういう切羽詰まったようなその緊急性を伝える言葉があると、避難しようっていう気になるんじゃないかなと思ったから、私は強い

口調で話すの、伝えるのに対しては反対ではないんです。けど、きつ過ぎたら、恐怖心が勝ってしまって動かない人もいるんじゃないかなと個人的には思って難しいところかなって思ってます。

○花内さん　私が気づいたのが、車の中で音だけなので、普通のテレビだったら音量そのままでも、あまり聞いてないんですけど、強い口調で気づいたので、例えばテレビつけっぱなしで家事してたりとか、気づかない状況であの音声が流れてきたら気づくと思うので、あれぐらいのほうがいいと思っています。

○伊東さん　寝てたので、テレビ消してたんですけど、後でなんかＸとかで流れてきた動画を見ると、あっ、こんな強いんかと思ったんですけど、でも、それだけ東日本大震災とか過去の防災、災害が生かされて、ああいう口調になったんだなと思うと、何もしてないわけじゃないだなっていう、改めて実感したっていう点でよかったと思います。

○義村さん　実際にNHKのテレビを見ていて、本当に強い口調だからこそ、緊迫感があるというか、逃げなきゃいけないんだっていうのが伝わってきて、私は強い言葉の方がいいのかなって思いました。

○本塚コーディネーター　はい、ありがとうございます。ちなみに塩津さんは、被災地に行かれてたということなんで、もしよろしければ、簡単に現地の状況であったりとか、皆さんに「報せる」っていう意味で、現地のSNSやメディアとかであまり載ってない生の状況を、少し共有いただければと思います。

○塩津コーディネーター　昨日まで、ちょっと現地には行ってたんですけれども、現地に入ると、やっぱり家屋が倒壊してて、本当に人もいない状況、住宅街に人がいない状況になってました。

そんな中で、みんなどこにおるのかっていうと、ライフラインも崩壊してるので避難所の方に行っていてたんですね。その人たちの話を聞く中では、やっぱりあの地震っていうのは、あの１回目に来て、２回目っていうのが分からなくて怖かったっていうふうな話も聞いてます。

津波が来た後、地震が来て、その後すぐまた津波の警報来ましたけれども、その津波の警報っていうのを知ってすぐ逃げたっていうふうな話は聞いてました。

これまでですね、東日本で津波の危険性っていうのはいろんな人が十分周知されてきましたので、それがつながったのかなっていういうところかと思います。その中で皆さんの活動っていうところが、「報せる」っていうところの活動を今されてると思うんですけれども、この活動で。そういったところが生きてくるので、皆さんからすると、これから人を助けるようなことが重要になってくるのかなっていうふうに思ってます。

一点だけ聞きたいんですけれども。今回の地震の内容とか、多分テレビとかSNSとかで見られたと思うんですけれども、その内容とかで、特に興味があるところとかって何かあったら教えていただけたらなと。SNS見たとか、テレビ見たときに、この情報よかったとか、何か関心があったとか、何かあったら。

○本塚コーディネーター　もしくは身内で一番Ｘとかインスタでシェアされたとか、自分の身内で一番回ってたことってどういうことかとか、あれば教えてください。

○花内さん　起きてすぐのときなので、津波が来るっていうのが一番衝撃だったので、常に更新しながらどれぐらいの津波が来るんだろうか、何分で来るっていうのは、南海トラフ地震だったら自分たちの住んでる地域も何分で来るっていうのは聞いてたのがあるんですけど、違うところで起こった地震だったら、自分たちのところに来るのかとか、マップみたいなところで兵庫県の上のほうの海岸線赤くなってたので、兵庫県危ないんかなみたいな、そういう話が多かったです。

○本塚コーディネーター　はい、ありがとうございます。

続きまして、彦根東さん行きましょうか。

○伊東さん　そうですね、津波がでっかく下に出てて、テロップが出るのは新鮮と言ったらあれですけど、こんなことあるのかって印象に残ってます。

○本塚コーディネーター　はい、ありがとうございます。じゃ、お願いします。舞子高校さん。

○義村さん　私も同じで、津波が伴う地震、今回がそうだったので、2011年の東日本大震災のテレビで見たことと重なって、すごく東日本大震災のことを思い出されました。あんなに大規模な津波が来るのかって思ったら、とても怖くなって、だから、テレビとかネットとかを使いながら、情報収集をしていました。

○本塚コーディネーター　ありがとうございます。

○藤嶋さん　津波の話で終わると面白くないと思うんで、別の話題を提供しようと思うんですけど、１つがボランティアとか援助に来ないでくださいという話ですね。度々聞くんですけどあんまりここまで強く言ってるのは聞かないので、内閣府のツイッターとかでも何か、流言は智者に止まるみたいな、そんなやつや、ことわざ使って何か言ってるのはあまり見ないので、それは面白かったです。以上です。

○本塚コーディネーター　はい、ありがとうございます。

○服部さん　私はＸの投稿からネットニュースになった記事なんですけど、地震が発生してライフラインが止まって、北陸新幹線とかサンバーバードの特急電車が止まったと思うんです。その止まったときに、終日運転見合わせみたいな、そういう情報、電光掲示板が使えない状態で、ホワイトボードにしてよく改札の前に置いてあると思うんですけど、それが日本語で書いてあって、それを日本語から訳せる方が英語で下に書いてくださってて、それを見た人がそのほかの言語にさらに訳していくみたいな、言語の翻訳リレーみたいなのやっていたという投稿を見て、ああ確かに帰省とか、お正月とかそういうタイミングがあったので、やっぱり特に観光客が多かったと思うんですけど、そういった方にも配慮してそのような連携を取れてるっていうことがすごい心温まるし、すごいいいニュースだなって思いました。

○本塚コーディネーター　はい、ありがとうございます。

私もすごく皆さんが多様な手段で情報入手してるっていうのに、驚かされてるというか、私も学校で教えてると、最近もうテレビがない家もすごく増えてきてて、でも一方で、今回の場合ですと、お正月って祖父母の、おじいちゃんおばあちゃんの家にいて、テレビあって、それを見てたって言うたんですけど、一番皆さんが使用するメディアとして、普段情報を受け取るメディアっていうのは何なんですか。

テレビ、スマホ、あまりないと思うんですが、新聞、ラジオ、SNS で言うとＸ、インスタ、あと何があります。

○塩津コーディネーター　LINE。

○本塚コーディネーター　LINE ね。ちなみに、一番自分が普段情報を見てるとか、今回の能登半島地震で情報収集してたのは何でしょうか。

○義村さん　テレビで見ることが多かったです。地震が起きたときに、ちょうどテレビがついていた状態だったので、そのテレビにずっとしがみついて、ずっと見てて、兵庫県の南側はあんまり被害とかはなかったんですけど、本当に何もできないっていう状況がすごく悔しくて、何か本当にずっとテレビは見て。

○伊東さん　布団に入りながら、Ｘを見てることが多かったですね。いろんな人が言ってるのを見て、割と新しい情報とかいっぱい入ってくるんですけど、それはよかったなって思うのと、テレビを見ようにも体が動かなかったっていうのはあります。全然体が動かなかったです。

○本塚コーディネーター　ありがとうございます。

○花内さん　最初にテレビで見てから、Ｘにしたのでって感じなので、最初に一番ずっと目にするのはテレビでした。

○服部さん　一緒なんですけど、テレビ見ながらリアルタイム検索で結構してることが多くて、２つ併用しているときのメリットとして、個人的に思ってるのは、テレビで報道するのはちょっとダウトがあったりして、その分Ｘやってるとパーンてニュース記事の速報で出たりするんで、そっちのほうが情報が入ってくるのが早いっていうのがあって、もちろん信憑性の問題もあるんですけど、そういった面では、私は両方使ってることが多いです。

○藤嶋さん　同じく両方を使って、テレビとツイッターの両方を使ってるんですけど、どっちの方に比重を重く置いてるかっていうと、多分テレビの方が多かったかなと思います。

○本塚コーディネーター　ありがとうございます。私も両方併用してて、本当にＸでいうと、生き埋めされていて助けが来てくれませんっていう情報がすごく拡散されて結局、一部本当のものもあって、一部嘘のもあったんですけど、皆さんもＸされていて、そういう情報って目にされた方って、会場の方も含めてですけど、Ｘのほうをされてて、生き埋めにされてます助けてくださいと、かなり拡散されて、名前と住所も出てたりしてたんですけど、受け取ったっていう、もしくは見たっ

ていう方、どれぐらいいらっしゃいますか。

ありがとうございます。すごく問題にもなってて、とはいえ、あれも新しい情報発信の方法なのかなと思うんですけど、皆さんも今回の能登半島地震のことも踏まえて、今まで情報発信するときに、例えば彦根東さんでいうと新聞発行されてますけど、読者の方から何かリプライとか、反響とか、何かコメントとかそういったものを受けることって何か、その中で何か印象的なこととかあったら、ちょっと教えてほしいなと。

○伊東さん　読者が生徒なので、僕たちも生徒なので、クラスの教室の中での会話とかで流れてくることは多いですけど、災害の特集とかはあんまり食い入って見てる人は少ない、やっぱり友達が載っている記事の方が嬉しいなと思いますし。そういう身近なところから関心をしていくというのも大事なのかなと思います。

○本塚コーディネーター　ありがとうございます。舞子高校さんも大分続けてられてますけど、今年はさらに防災読本、同じく高校の皆さん、生徒の人もっていうので作られたんですけど、今のところ反響とか、何かあったりします。

○義村さん　防災読本はまだ完成したばかりなので、まだ舞子高校生に見てもらうっていうのはできてないんですけど、インタビューの方は、冊子とか年表を実際に見てもらって、それで意外と生徒の人も被災体験を、先生の被災体験を聞くっていう経験があまりない人が多かったので、先生の被災体験を知れて、災害を自分ごととして捉えることができたって言ってきた生徒はいました。

○本塚コーディネーター　なるほど。ありがとうございます。まだ論文組は、発表はまだしてない。

○藤嶋さん　発表。そうですね。途中経過の発表みたいなのを、学部内ではしましたけど、それぐらいです。

○本塚コーディネーター　そのときに、数時間かけた図に対する反応は良かったですか。

○藤嶋さん　いや、直接聞いたわけではないですけど、結構褒められたって奥村教授が言ってました。

○本塚コーディネーター　ありがとうございます。

ちょっと質問変わって、安富ゼミのところで少し気になったのが、中間のときにも質問させてもらったんですけど、現地に行ったからこそ、より伝わった、実感した、行ったからこそっていうのはみんなの共通の感想として、挙げていただいてたんですけど、少し難しい質問すると、神戸も現地なんですよね。で現地で活動してる皆さんは、現地では気づかなかったけど、でも岩泉に行ったら気づけた、その違いって何なのかなって、何か体験してみて、どこに何か違いがあったのか、逆に神戸に来てもらうと、ほかの人が気づくっていうこともあったりすると思うので、何かちょっと、自分なりに何か思ったことがあれば、教えていただきたい。少し難しい質問ですが。

○服部さん　個人的に思ってるのは、現地に行くことによって、やっぱり自分ごとのように捉えることができるんじゃないかなと思うんで、でも私たちはその神戸にいることが当たり前で、日常になっているので、そういった面で、災害とかに対する興味とか、それが日常生活に慣れてしまっている部分も多いんじゃないかなと思います。そういったところで、私は岩手県とか行ったこと、スキーとかでしかなくって、そういったことでしか行ったことなかったので、正直言ったら非日常の世界というか、そういった経験を直接聞くことができたことによって、ああ、だからこうなってるんやって、いろいろ自分の中で思うことがあって、そういったことを報せていきたいなって、自分なりの解釈も出て思うようになりました。

○本塚コーディネーター　はい、ありがとうございます。難しい質問ありがとうございます。ちなみに日常という話ですと、尼崎小田高校さんが防災を特別なタイミングと捉えるんじゃなくて、日常とのつながりっていうのをすごく意識した、それすごくいいなと思ったんですけど、その中で実際に自分たちの活動を通して、それが伝わってるとか、伝えるときに、より意識してることがあれば、特に今日すごく興味を持ったのは劇の話なんですけど、劇の中身は全く教えてもらえなかったんですけど、そこの話はちょっと意識して教えていただければと思うんですが、いかがでしょうか。

○花内さん　劇の内容なんですけど、避難訓練をしに、発達障害の方と一緒に避難訓練して、ショッピングモールで避難したんですけど、そのときに冷たい目線を感じてしまって、その何か言われてるなみたいなの

はなかったんですけど、発達障害持ってる方が、手を叩いたり、ジャンプしてちょっと走り回ったりっていうのをしたときに目線を感じて、ついている職員さんが、謝って、すみませんって謝ってみたいなのを実際に見て、今までだったらそっち側で気になる、何か嫌な目線だけでもなく、何やろとか、気になるっていう目線もあると思うんですけど、それに対して発達障害を持つ方が、どういう心情でその行動を起こしているとか、何でパニックになるのかっていうのを理解してもらって、家族とかが生きやすい環境をつくるサポートしてほしいっていうのを伝えたくって、劇にしようとしてます。

○本塚コーディネーター　ありがとうございます。ちなみに劇はいつ頃、もう完成はされてるんですか。

○花内さん　シナリオは完成したんですけど、まだ撮影のほうはちょっと、劇撮って流すみたいな感じなんですけど、冬休み明けに撮影して、本番も作成するっていう感じです。

○本塚コーディネーター　来年度のお楽しみということで、はい。楽しみにしております。

　あと10分ほどになって、残りもわずかになってきたんで、今後の未来のところの話で、舞子高校さんに聞きたいんですけど、今後、先生だけじゃなくて、地域の方にインタビュー広げていきたいという話ですけど、インタビューした先生の、その内容のブラッシュアップもしていただいて、改めてインタビューするとか、そういった方法もあると思うんですけど、部の方針でもいいですけど、どういうところに力入れて、その次のインタビューというのを進めていこうっていうので、地域の人になってとこ、もうちょっと詳しく教えていただければと思います。

○勝部さん　すいません。舞子高校でインタビューコーナーしてる勝部という者なんですけど、義村さんに代わって答えたいです。

　いろいろ話があって、校内だけじゃなくて地域に広げたいというような話をしたんですけど、おっしゃってたように今までインタビューした先生のもブラッシュアップして、もう一回話聞いたりとか、インタビュー終わった後で、これ話しとけばよかったなとか思う方もいらっしゃると思うので、そういうブラッシュアップもしたいなと、いろいろ考えていて、やっぱり年代も今の時点でももう、先生の中でも阪神・淡路大震災のことを覚えていないと言ってたり、知らないと言っている方が増えてきて、今の段階だったら、まだ阪神・淡路大震災のことを話せる先生もいると思うんですけど、段々減ってきて、みんな分からないというふうになっちゃったら、してる意味があんまりなくなっちゃったりするかもしれないので、そういうときに、地域に広げて、舞子高校の周りにいる高齢者さんとか話してくださる方がいたら、そのへんはまだ決めきれていないんですけど、そういう枠を校外に広げてしたほうが、何か専門的な話だったり、違う視点からの意見も聞けるんじゃないかなと思っています。

○本塚コーディネーター　はい、丁重にありがとうございました。

○塩津コーディネーター　その新聞のことでちょっとお聞きしたいんですけれども、最近は活字離れとかっていうふうなことで、あまり文字読まない人とかも増えてきてるかなとは思うんですが、先ほど関西大学さんのほうは、図をきれいに作って見やすいようにしたっていうふうにおっしゃってたと思うんですけれども、新聞を見るときに、例えば写真入れたりとか、ここの図変えたりとか、何かそんな見えやすくしたりとかっていうようなことっていうのは、今は何かされてたりするんですか。

○伊東さん　はい。文字のようなフォントになってしまうと、読んでもらう人が少なくなってしまうので、お配りした新聞の530号の４面見てください。こんな感じで彦根城の写真を載せたりしたりして、インパクトあると思うんですけど。そういうことで写真を大きく載せたりとか、見出しを大きくしたりだとか、レイアウトの面でも結構考えて作ったと思います。

○本塚コーディネーター　一面使ってたりするのは、その一番主張したいところで、今回のポイントっていうのがあんな感じで出てくるんですか。

○伊東さん　あの面の概要と、そんなところです。

○本塚コーディネーター　なるほど、ありがとうございます。

　今日、パネルディスカッションもそろそろ時間が迫ってきてますので、皆さんの活動の話、能登半島地震の話。また、皆さんの活動の中でかなり楽しくとか、

より伝わるようにこだわってるとか、いろんな話があったと思います。最後に皆さんのほうで、今回のパネルディスカッションの問いである「これからの『報せる』は？」に対して、今日の意気込みじゃないですけど、皆さんなりに回答をいただいて、パネルディスカッションを終えていきたいと思いますが、じゃあ順番に行きましょうか。

そしたら舞子高校さんからお願いいたします。

○義村さん　これからの幸せは、防災に興味があるないに関わらず、しっかりと分かりやすく、誰が読んでも分かりやすいような防災を伝えていくことだと思っています。防災に興味がないからといって、備えをしなければ、とてもそれは怖いことだと思うので、だから、誰が読んでも分かりやすいような防災読本やインタビューの冊子を使いながら、これからも活動をしていきたいなと思っています。

○本塚コーディネーター　ありがとうございます。続きまして彦根東高校さん、お願いいたします。

○伊東さん　そうですね、僕がこういうことをしている間に思っているのは、僕自身、東日本大震災とか、阪神・淡路大震災もそうなんですけど、まだまだ知らないことが多過ぎて、なので、こうやって取材して、新聞作っている僕ですら知らないことがいっぱいあるので、ただ読んでいるだけの読者ってもっと知らないことがいっぱいあると思うんですよね。そういう人に向けて、分かりやすくというか、もっと、ここはこうなんだと知ってもらえるような新聞を目指していきたいと思っています。普段の新聞でも分かりやすく伝えるのが大事なんですけど、興味がないと本当に新聞すら開かないみたいなことになってしまうので、それだけは絶対に避けないといけないと思っているので、そういう読んでもらえる工夫をしつつ、興味を引く内容で興味を引いていきたいなと思います。

○本塚コーディネーター　はい、ありがとうございます。自動販売機から、原子力発電所のところはすごく見事やと思いますよ。身近なところから、いいことだと思います。尼崎小田高校さんお願いします。

○花内さん　未災者から未災者へというお題があったと思うんですけど、未災者も結局未来では被災者になるかも分からないので、防災意識を高めるのに、防災意識がないって、個人的には興味がないっていうよりかは、怖いからあんまり考えたくないっていうのが大きいと思うので、今日発表で言ったように、楽しく防災につなげれることとか、あんまり怖いイメージを持たずに伝えるのが大切かなと思うので、そういうことを意識して報せられたらいいなと思っています。

○本塚コーディネーター　はい、ありがとうございます。神戸学院大安富ゼミさん、お願いいたします。

○服部さん　はい。彦根東高校さんとちょっと似てしまうんですけど、まず報せるためには、私たちが知識を得て知る必要があると思ってます。例えば友達に勉強教えるときにも、自分が分かってないと教えれない、分かっているから教えるということがあると思うんですけど、そんなふうにまず自分たちがそういう情報仕入れたり、積極的に取り入れたりすることによって、それを得てから初めてそういった発信、報せるという立場になるのではないかなと、個人的には思ってます。目標、その報せることによって、私たちの安富ゼミだったら、今回の岩泉町の訪問以外のこと、興味があることや関心がバラバラだったり、消防とかほかの災害であったり市役所関係とか、目的とかも業種とか、希望する業種とかもバラバラなメンバーなんですけど、そういった子たちが、いっぱい自分の持ってる知識を集結させることで、できることも何かあるのではないかなと、個人的には思っています。

○本塚コーディネーター　はい、ありがとうございます。では奥村ゼミお願いします。

○藤嶋さん　未災者が未災者に報せるっていうことは、結構難しいことだと個人的に思ってて、自分が経験していないことを、他者に報せるっていうのは、SNS で出回ってる情報とかと同じような感じがしてて、だからこそその分、どういった内容のことを報せる、後世に残していくのかみたいなことは、ちゃんと情報の裏取りを取っていくっていうのが、これからも大事かなっていうことを思いました。

○本塚コーディネーター　はい、ありがとうございます。

では、このパネルディスカッションの方法を、グラフィックレポートのほうで残していただいておりますので、最後のまとめとして、グラフィックレポート担当していただいた多田さんのほうから、どういった話が出てきたのかを紹介していただいて、パネルディス

カッションのほうを閉めたいと思います。

それでは多田さん、よろしくお願いいたします。

○多田グラフィックファシリテーター　本塚先生ありがとうございます。長いことお疲れさまでした。この皆さんのパネルディスカッション及び前半の発表もそうだったんですけれども、このようにイラストと文章でグラフィックレポートという手法なんですけれども、まとめさせていただきました。

これも一つの「報せる」という手段なのかなと、文字ばっかりじゃなくて絵と文章で、雰囲気まで伝えることで、この場の記憶が温まっていくところまで伝えるっていうのも、これも一つの「報せる」の手段かなというふうに思います。

今日、どういう話が出たのかというところですけれども、これまでのメモリアルアクション、大まかに3年シリーズということで、まず「聴く」のフェーズだった2022年、そして「創る」のフェーズだった2023年、そして「報せる」のフェーズだった2024年、今年で一周したというところで、皆さんからじゃあ「報せる」について、どういうことを気をつけてやっているのかというところのキーワードを最初に集めましたけれども、その情報を入手するであったりとか、自分のやりたいこと、そして楽しいことを生かして活動にしていこうというような意見があったかなというふうに思います。

どういうふうにこの活動を工夫していったかということなんですけれども、どんどん描いていくにつれ、能登半島のとき何してたっていうか、どういうことで情報収集してた、どういうふうに自分は報されたんっていうところを聞いていったというふうに思うんですけれども、見ていくと、「報せる」ということは、最初におととし去年とやったこの「聴く」というところ、そして「創る」というところのブラッシュアップにつながるんだろうなというところが、やはりこういうところから出てきていくのかなという感じがします。

この「報せる」に当たって、もっと工夫してこんなことをもっと聞かなあかんなとか、例えば新聞とか、防災読本とか、今日も出てますがゲームとかね、いろんなところでも当たると思いますけれども、特に興味・関心を持ってもらうように、見やすくなるようにっていうところで、イラストを多用したりであるとか、書き方を工夫したりであるとか、聞き方を工夫したりであるところを「創る」っていうことは、結局全部一つの循環でつながっている、今年は「報せる」でしたけれども、前のテーマだった「聴く」であるとか、「創る」っていうところに、そのままフィードバックされているっていうところが、非常に多かったなというふうに思います。

あの能登半島のとき、私もこのXとかテレビですね、両方側からの情報を収集してましたけれども、まずこの情報を知るっていうところが皆さん、大事だというふうにキーワードのところでも、後のまとめのところでもおっしゃってましたけれども、情報を集めたっていうところで、確かにこの偽のついた情報集まるんだけれども、結構、玉石混交であって、どれがフェイクなんだろうっていうところで、それを知る能力っていうのも大事なのかなというような意見が出てきたかなというふうに思います。

こうやって描くこともこの「報せる」手段ではあるんですけれども、じゃあ次、皆さんがやっぱり共通の課題として、聞いてて、描いていて思うなあというふうに思うのは、これから、未災者から未災者へ伝えるっていうことは、この大きなテーマではあるんですけれども、さらに一歩踏み込んで、防災に全く興味・関心のない人にどう伝えて、報せていくかっていうところが、これからの大きな課題なのかなと、皆さんの話を聞いていて思いましたし、私も防災に携わる人間として、一番課題にしているところでありますが、こういう答えというか、アイデアの芽というのが、今日もいっぱい出てきたのかなと思っていて、今日も新しい防災ゲームの発表であるとか、防災読本であるとか、新聞であるとか、新聞でも身近なところから興味関心を引いていくんだと、友達が出てる記事だから興味持って見てくれるとか、そういうところで、最初に皆さんにした質問の中で、特定の人に伝えるか、全員に広く伝えるのか、どっちですかって聞く問いで、何か見てると特定の人に伝えるって人の割合がもうちょっと多かったのかなという気がしています。

この能登半島のもそうなんですけれども、これから

こういうニッチなというか、限られたところに伝えていくみたいなところ、力というのがすごい大事になってくるのかなというような気がいたしました

　というところで、もう１人、今日グラフィックを描いてくださった山越さんのほうからも、お伺いしたいと思います。

○山越グラフィックファシリテーター　ありがとうございます。私の方ではこの場でどんなことが起きていたのかっていうことをちょっとお返しできたらなと、私が受け取れた範囲でお返しできたらなと思っています。

　最初は双方向でっていうふうに、本塚先生もおっしゃってたと思うんですけど、参加者の皆さんの様子のほうを描かせていただきました。

　最初はちょっと緊張もありつつ、ちょっと固い表情もありつつで、ほぐされていって、手を挙げたり、体を動かしたりしながら、自分はどうだろうっていうような意見を、さっき多田さんがおっしゃっていたような質問に対して答えていく中で、ちょっとずつ緊張がほぐれていっていたんですけれども、能登半島地震のリアルタイムの出来事の話の中では、それぞれに思い起こすところがあるのかなということで、いろんな表情、内容を見返したりというような様子もあったかと思います。

　対して、ここで率直な感想、リアルな感情、出ていたなっていうか、元旦に地震なんて起きるんだっていう、本当に率直なリアルな体験、生の声を聞くことで、内心共感していたのではないかと思います。

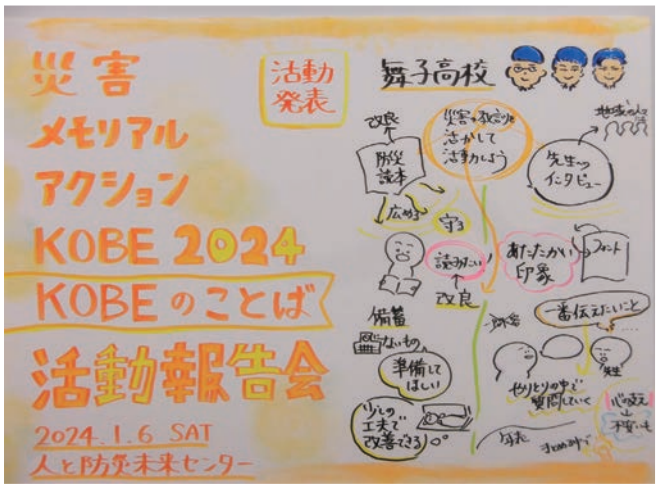
　私自身、活動発表のほうでグラフィックを描かせていただきまして、自分が参加者として参加するっていう声であったり、受けてる側と「報せる」側のギャップという認識のギャップがあったかと思うんですけど、能登半島地震のお話がこの後されたことによって、「報せる」なんですけれども、自分たちがリアルタイムで「報された」者として、どのように感じたか、何を思ってどんな情報をどのように受け止めたかという話、そういった双方の視点では、話はされたんかなと思います。以上です。ありがとうございます。

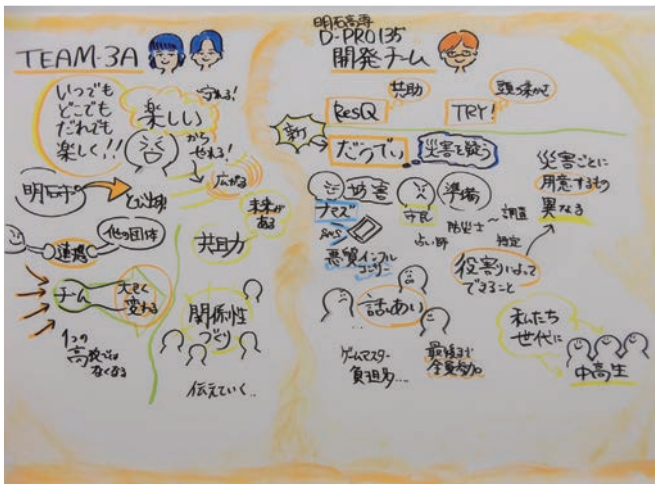
○本塚コーディネーター　ありがとうございます。本来ならパネリストディスカッションのコーディネーターがまとめて終わると思うんですけど、ゲストに丸投げでお願いいたしました。発表、登壇者の皆さんもありがとうございます。まだまだ我々の活動って活動途中で、劇もこれから公開ですし、読本もおそらく来年度ぐらいになったら完成することになっていると思います

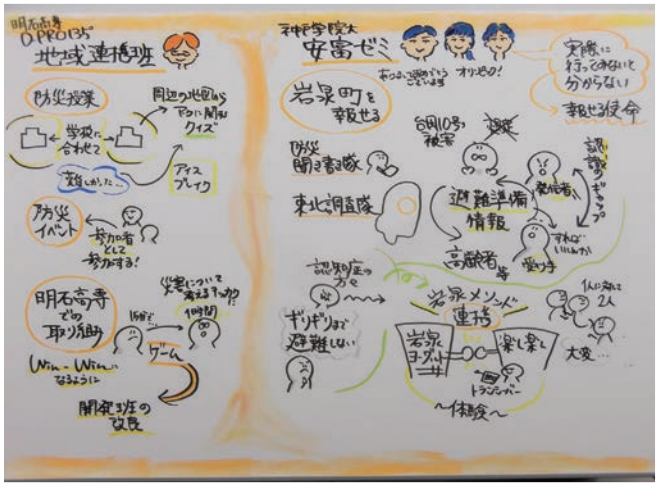
で、また来年度、皆さんの活動が継続して、次の成果を持って集まって、一緒に共有できることを楽しみにしてますし、メモリアルアクション KOBE の活動の時期だけじゃなくて、普段から互いに交流できたらと思いますので、ぜひ今後ともよろしくお願いいたします。

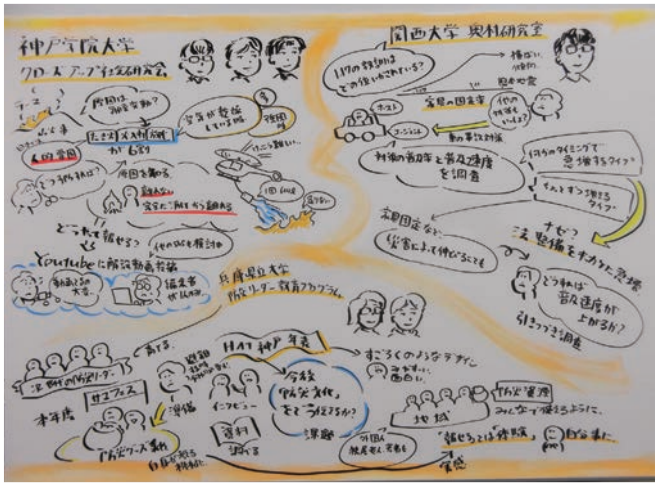
　これでパネルディスカッションのほうを、閉じさせていただきたいと思います。ありがとうございました。

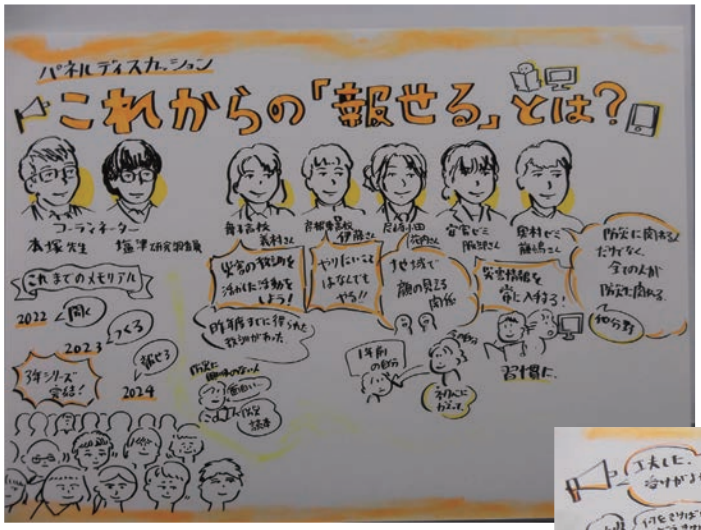
グラフィックファシリテーション記録

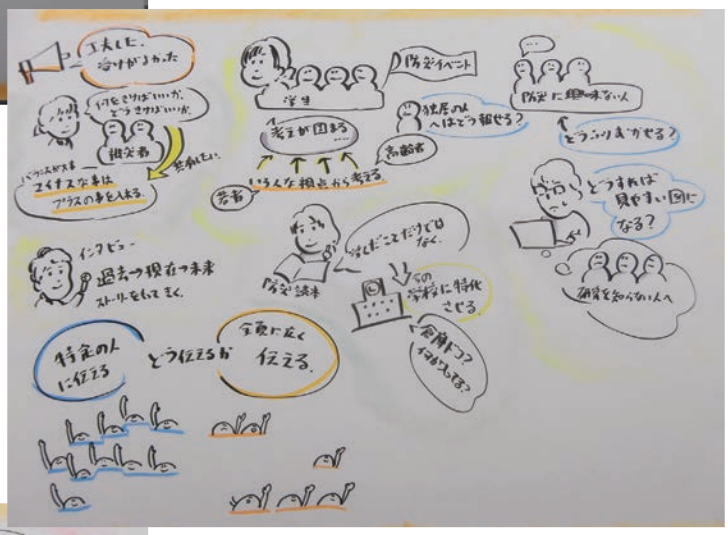




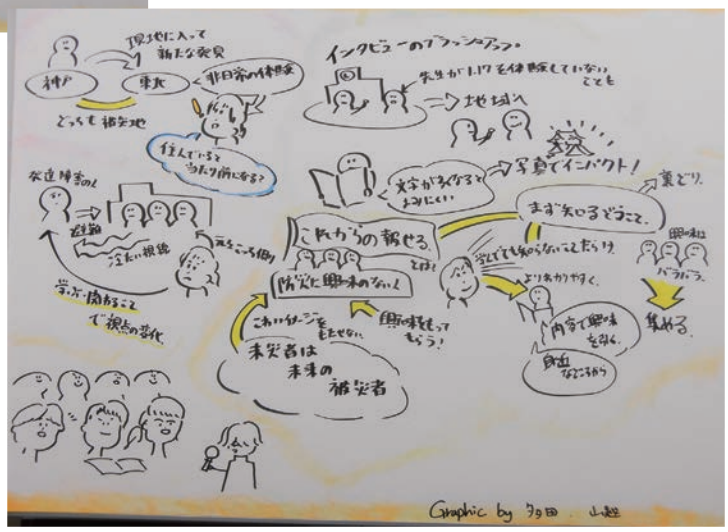





パネルディスカッション
これからの「報せる」とは?
コーディネーター
本塚先生
塩津研究員
これまでのメモリアル
2022
2023
2024
3年シリーズ完結!
つくる
報せる
防災に興味のない人
防災に関わるだけでなく全ての人が防災に関わる
知分野
習慣化
初心に戻って


工夫した、治りがよかった
何をきっかけにいかがどうきっかけにいかが
被災者
学生
防災イベント
防災に興味のない人
居住の人へはどう報せる?
どうふりむかせる?
考えが固まる
高齢者
いろんな視点から考える
マイナスな事はプラスの事を入れる
インプット
過去→現在→未来
ストーリーをもってまく
防災読本
どうすれば見やすい図になる?
知識を知らない人へ
特定の人に伝える
どう伝えるか
全員に広く伝える

R6
能登半島地震
何してた?
逃げること!!
3.11の教訓が活かされているのでは?
元日に地震があるとは…
TVをつけたらすぐ…
情報の入手手段
情報にラグ?
TV→X
集める
緊急性が伝わる!
現地では…
言語の翻訳
心の持ち方
リフライ・反芻
3.11と重なった
自身に大津波警報!?
南海トラフは知らない
教室で
友人の伝えている記事は本当?


現地に入って新たな発見
神戸
東北
非日常の体験
どちらも被災地
住人でいると当たり前になる?
インクビューのブラッシュアップ
先生がHPを体験していないこと
地域へ
文字が多くなると読みにくい
写真でインパクト!
薬どり
まず知ることから
これからの報せる
防災に興味のない人
学んで知ることで視点の変化
未来の被災者
内容で興味を引く
集める
Graphic by 羽田 小畑

閉会のあいさつ

河田惠昭センター長

○人と防災未来センター河田センター長

皆さん、どうもご苦労さまでした。

多分、私はこの会場で一番歳を取ってると思うので、そういう意味で、最後の挨拶という形で感想を述べさせていただきます。

今日は、最初に災害の経験というか体験というか、そういうものを直接知らない人が、知らない人にそれをどう伝えるかという、未災者が未災者に教訓をどう伝えるかというテーマで議論をしていただいたんですけども、これは非常に難しい問題だと思いました。

私の経験をお話したいと思うんですが、皆さん、明治三陸津波っていうのは、いつ起きたか知ってますか。1896年ね。昭和の三陸津波っていうのは1933年なんですけど、この間隔37年なんですよ。皆さん、宮沢賢治っていう小説家、童話作家知ってるでしょ、あの「銀河鉄道の夜」とか。彼は、明治三陸の津波の起こった年に生まれたんです。そして37歳で昭和三陸の津波の年に亡くなったんです。

つまり、いろんな知識っていうものを大切だと思ったときは、楽しい思い出として記憶するっていう工夫がとても大事なことで、しかも東日本大震災が起こったんですけども、過去400年間で、東北で津波の発生間隔は平均37年なんですよ。こういうふうに知ると、私は専門家ですから、そういうメモリーにきちんとそれが残るんですけど、忘れないためには、楽しい思い出をもっと楽しくするという努力をしていただくと、この必要な知識っていうのは、その楽しいというキーワードで忘れなくなってしまうということなんですけどね。

私、今年元旦、娘と女房と３人で、車で10か所初詣に行こうと最初に大阪の天満の天神宮に行ったんです。菅原道真を祀ってる。いっぱいでしてね、山門の外まで行列ができてまして、その行列の最後のところで手を合わせました。

次は堀川戎へ行ったんです。戎さんっていうのはお金を儲ける神さんです。そこで参拝して、その後、住吉大社行ったんです。住吉大社っていうのは紀貫之が土佐から帰ってきたときに、住吉大社の辺り浅い海だったもんですから船が座礁して、大阪の市内に入るのに３日間、足止めを食ったところなんです。そこもやっぱりいっぱいだったんですね。だからまた行列の最後で手を合わせて。

今度は門戸厄神に来たんです、娘はベビーカステラが欲しいというので、門戸厄神の駅前にベビーカステラ屋さんがあるんで車を停めようと思ったら、車が揺れ始めたんですよね。風にしてはおかしいなと、地震だったんですよね。もちろん車の中にテレビが入ってますから、すぐにテレビで、能登で地震が起こったって。震度は言ってくれるんだけども、マグニチュードを言ってくれないんで、津波がどうなのかっていうのは、実はあの辺りはプレート境界がないんですよね、フォッサマグナはもっと東ですから。津波が起こるとしたら、大きな活断層がなければいけないんで。

問題は富山湾に面している石川県の珠洲とか輪島の海岸堤防は、大きな波が来ないものですから非常に低いんですよ。１メートル程度の津波でもやられるっていうことは、もう分かっていますのでね。そういう情報をもっと、震源は分かってるんだから、早く出さなきゃいけないんですけども、気象庁は初めに津波警報を出したのを大津波警報に変え、NHKのアナウンサーは、テレビなんか見んと逃げろって言ってましたんで、これは非常にいい発言だと思っていました。

今日申し上げたいのは、やっぱり未災であろうと被災しようと、その思い出をどうやって末永く持ち続けるかということがとても大事だと。そのときに悲しい思い出はまずいので、思い出をもっと楽しくするように、自分で加工する必要があるということなんですよね。

防災の研究もう50年近くやってますけど、私、楽しくて仕方がないんですよね。たまたま娘の車に乗ってましたからテレビ見たんですけど、家ではテレビ一切見ないんです。だから自分が出演するテレビ番組も見ないんですよね。でも、テレビ見なくても楽しいですよ。だって防災研究で何が楽しいかっていうと、そのことを知ってるのは自分１人だっていう、このことなんですよね。研究を進めれば進めるほど、分かってるのは自分１人だっていう、これ実感を持つと楽しくて仕方がないっていうことになります。嫌で嫌でやることは絶対身につかないんですね。やっぱり、やるからには楽しく考えてやるってことです。

これから南海トラフ地震が起きます。私、どう考えてるかというと、宮沢賢治さんは２つの大震災の37年しか生きれなかったでしょ。僕は昭和の南海地震の年に生まれたんですよ、1946年。ということは、皆さんいいですか。僕が死んだ年に次の南海トラフ地震が起こる可能性はあるということでしょう。ということは僕が長生きしないと大変じゃないですか。だから僕は日本の運命を僕の寿命が支えてると。今は非常に健康なんですけどね。今77歳、もうじき78歳になりますけどね。南海トラフは78年動いてないんですよ。僕がずっと長生きするとね、いいですか、南海トラフ地震待ってくれてるんですよ。僕が死んだってなったら危ないって。それまでは、地震は起きません。僕はそういうふうに考えて自分の健康を保つようにしてるんですよ。自分の健康のためじゃないんですよ。南海トラフ地震が待ってくれてると。もう体が調子悪くなってあの世へ行くと地震は起こる。そういうふうに考えたら楽しいでしょう。一生懸命、健康で仕事をするということは、自分にとってはとても大切なことになっているんです。

いろんな情報をどうやって伝えるかといったときに、その情報をいただいた方が、楽しい思い出として記憶に持っていくっていうことが１つのコツだと思うんですね。悲しいことだから悲しめじゃなくて、悲しいことだけれども、ものの見方によっては、そうでないっていうような知恵をやっぱり働かさなければいけないと思うんですけどね。

人と防災未来センターも今年でもう21年になりますけど、昨年から「防災100年えほんプロジェクト」というのをスタートしまして、100年後に500冊の防災の絵本が世界に向かって提供されるって。考えるだけで楽しいじゃないですか。そういうふうな形で防災を進めるということが、とても大切だと思うんですよね。

私はだからサボるわけにはいかないんですね。健康で仕事をするということが、南海トラフ地震が起こらないことにつながってると考えてるんですね。非常に身勝手な考え方ですけどね。人生って１回しかなくて自分だけのものですから、大切にしていただきたいと思います。

災害メモリアルアクションKOBE2024のことば

災害メモリアルアクションKOBE

ACTION 2024 のことば

今の高校生より下の世代は震災の記憶がないという人もいて、まだ生まれていない人も増えています。（中略）
過去どのようなことがあったのか、現在何をしているのか、そして次の災害に備える、ということを絶対に知る必要があるのが私たち若い世代になります。

地域に報せたこと、
それは共助とそのための地域でのつながりの大切さです。
共助は地域が復旧し、復興するまで続きます。
地域の人々がそれぞれできることで協力すればいい。
つまり共助には未来があります。

ある教諭は（被災したとき）心の支えになったのは、
自分の子供だとおっしゃっていました。
しかし、同時に大きな不安にもつながったともおっしゃっていました。
心の支えとは、
被災者の心を癒すものだとばかり思っていましたが、
支えだけでなく不安にもつながってしまう
ということを新たに学びました。

Q. 様々な層に「報せる」活動の中で、
意識していること、工夫していることは何ですか?

防災読本に**調べたことや学んだことだけを載せるのではなくて、**（自分達が通う）舞子高校に即した形で載せるようにしています。

学んできた立場からするとこれは普通ということも、
1年前の自分なら全然知らなかったことだったり
っていうのがあるので
知る前の自分の気持ちを大事にして、
いろんな視点から考える、ということを工夫しました。

Q. 1/1の能登半島地震。
報される側として、気づいたことは…?

1月1日に地震って起きるんだなって驚いて。
防災を学んでいても怖いなって感じました。

（ホワイトボードに書かれた、電車の「終日運転見合わせ」の日本語の下に、英訳を書き込んだ人がいて、別の人がそれを他言語に訳して…というX(Twitter)の投稿を見て、）
言語の翻訳リレーみたいで。帰省する人や、
お正月で観光客も多かったと思うんですけど、
そういう方々にも配慮して連携が取れていた、
心温まるいいニュースだなと思いました。

Q これからの『報せる』は?

まず自分が知ること。
情報を仕入れたり、積極的に取り入れて、
それを経て初めて発信、
報せるという立場になるんじゃないかな。

自分が経験していないことを他者に報せるっていうのは、
SNSで出回っている情報とかと同じような感じがしてて。
だからこそ、**ちゃんと情報の裏取りを取っていくこと**が
これからも大事かなと思いました。

現地に行くことによって、
自分事のように捉えることが
できるんじゃないかなと思った。
経験を直接聴くことによって、
自分の中で思うことがあって、
そういったことを報せていきたい。

未災者も未来の被災者になる。（中略）あんまり**怖いイメージばかりを持たせずに伝えるのが大切。**そういうところを意識して報せられたらいいな。

『報せる』を意識することで、『聴く』、『創る』がブラッシュアップされるんだと思います。

プログラム

伝える大震災、つながる防災

災害メモリアルアクションKOBE

ACTION 2024

KOBEのことば

参加無料

活動報告会

日時 **2024.1.6[SAT]**
10:00→13:15

会場 阪神・淡路大震災記念
人と防災未来センター

これまで「阪神・淡路大震災」を経験した世代が教訓と提言をまとめた「メモリアルコンファレンス・イン神戸（1996～2005）」、そして、その教訓を次世代に伝えるために「災害メモリアルKOBE（2006～2015）」を実践してきました。

2016年からこの先の10年を見据え「KOBEのことば」をキーワードに「災害メモリアルアクションKOBE」という取り組みを開始しました。阪神・淡路大震災のつらい経験を二度と繰り返したくないという強い思いから、学んだことを次に活かすことができる形でつないでいこうという取り組みです。大震災から20年以上経った今だからこそ聞けることば。今しか聞けないことば。その個々の経験を未来へどう活かせるか。世代を超えて、共有し、話し合い、未来へつないでいく。今のKOBEだからこそできるアクションです。

近い将来起こりうる南海トラフ巨大地震を見据えて、これから大震災を経験するかもしれないすべての人びとへ、防災の意識を継続させ、少しでも被害を小さくするために。「未災者」が大震災を知り、さらに「未災者」に伝え、つないでいく、新しいチャレンジです。

私たちはこれまでにないアクションにより、継続的な取り組みの検証と検討の場を通して、将来の被災者を減らします。

主　催：人と防災未来センター、京都大学防災研究所
共　催：京都大学防災研究所 自然災害研究協議会近畿地区部会
企　画：災害メモリアルアクションKOBE企画委員会
後　援　兵庫県教育委員会/神戸市/神戸市教育委員会/朝日新聞神戸総局/読売新聞神戸総局/毎日新聞神戸支局/産経新聞神戸総局/神戸新聞社/NHK神戸放送局/ラジオ関西/神戸学院大学/明石工業高等専門学校/関西大学社会安全学部/兵庫県立舞子高等学校/兵庫県立大学/兵庫県立尼崎小田高等学校

プログラム

※敬称略

10:00　開会挨拶
災害メモリアルアクションKOBE 企画委員会委員長
人と防災未来センター 上級研究員
京都大学防災研究所 教授　牧 紀男

10:05　活動発表
発表：①兵庫県立舞子高等学校
②滋賀県立彦根東高等学校
③兵庫県立尼崎小田高等学校
④TEAM-3A
⑤国立明石工業高等専門学校 D-PRO135°（明石高専防災団）開発チーム
⑥国立明石工業高等専門学校 D-PRO135°（明石高専防災団）地域連携チーム
⑦神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ
⑧神戸学院大学 クローズアップ社会研究会
⑨関西大学 社会安全学部 奥村研究室
⑩兵庫県立大学防災リーダー教育プログラムチーム

12:15　パネルディスカッション「これからの『報せる』は？」
コーディネーター：国立明石工業高等専門学校 准教授　本塚 智貴
人と防災未来センター 研究部 研究調査員　塩津 達哉
グラフィックファシリテーション：大阪防災プロジェクト共同代表　多田 裕亮
山越 香恋
パネリスト：兵庫県立舞子高等学校
滋賀県立彦根東高等学校
兵庫県立尼崎小田高等学校
神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ
関西大学 社会安全学部 奥村研究室
以上5団体代表

13:10　講評・閉会挨拶
災害メモリアルアクションKOBE 企画委員会顧問
人と防災未来センター長　河田 恵昭

災害メモリアルアクションKOBE

ACTION 2024

全体テーマ：

KOBE のことば

「KOBE」とは、阪神・淡路大震災の被災地域全体と、災害の影響を受けたひと、そして災害後まちのために活動したひと、すべてを表現しています。
阪神・淡路大震災から28年、大震災を直接経験していない若い世代の人たちが、災害を経験した人々へのインタビュー、アンケート、交流事業などの活動を通じて、次世代に伝えるべき「KOBEのことば」を紡ぎ、活かし、拡げます。「過去・いま・未来」を見据え、世代を超えて活動する、最先端のアクションです。

兵庫県立舞子高等学校

舞子高校チームは、先生方への被災体験インタビューや、防災ブック作成の活動に取り組んでいます。多くの人に災害の怖さを知ってもらい、防災の必要性を感じてほしいです。これからも未災者が防災・減災を考えるきっかけを作れるように頑張ります。

国立明石工業高等専門学校 D-PRO135°（明石高専防災団）

地域連携チーム

小中学校での防災授業や防災イベントの参加などの活動をしています。防災を楽しく学んでもらうために、避難所運営ゲーム「チャレンジ!」や防災ボードゲーム「RESQ」の体験、クイズを交えた講義などをしています。今年は、更に楽しい防災授業を目指して話し合いを重ねています。

開発チーム

防災ゲームの開発や改良、防災クイズの製作を行っています。今年度は、新たな防災ゲームとして人狼ゲームを模した防災ゲームの開発を進めています。まだ試作段階ですが今年度中には第一段を完成させたいと思っています。高専生ならではのアイデアが詰まった、遊んで学べる防災ゲーム作りを続けています。

神戸学院大学 現代社会学部

安富ゼミ

神戸学院大学社会防災学科安富ゼミ「防災聞き書き隊PARTⅢ」です。今年度は平成30年8月の台風10号で9人の犠牲者を出した岩手県岩泉町の高齢者施設の責任者らにインタビューし、その教訓として行われている「岩泉方式」をまとめています。これを神戸の皆さんに報せます。

クローズアップ社会研究会

今回は、「山火事」をテーマに調査・考察していきます。山火事は身近に起こっている災害なのにも関わらず、あまり着眼されていません。そこで、高御位山と加古川山林でフィールドワークを行い、動画を作成するなどして、山火事の現状を報せていきます。

滋賀県立彦根東高等学校 新聞部

東日本大震災復興支援特集「福島をつなぐ」の連載を始めて12年が経ちました。物価高騰という滋賀の高校生にも身近な所から、ALPS処理水やエネルギー問題、福島の原発災害のその後を追いました。また弱者×避難と題し、みんなで逃げるための備えについて考えました。

兵庫県立尼崎小田高等学校

はじめての参加です。取り組みの柱は2つ。フレイル予防体操の開発&災害食レシピの作成、発達障がいを持つ人が平時から災害時まで生きやすい社会を構築するための理解促進のための劇のシナリオ作成です。
活動の成果を地域住民に報せていきます。

TEAM-3A チーム トリプルエース

「いつでも・どこでも・だれでも楽しくぼうさい」がテーマのユースの自主活動グループです。昨年の5月に有志のメンバーで発足。今年度から新たに明石市役所・社協・コープこうべとの連携により地域に根差した活動を展開しています。

兵庫県立大学防災リーダー教育プログラムチーム

まちびらき25年を迎えたHAT灘の浜の住民の方々から、阪神・淡路大震災からどのように復興してきたか、どのような困難があったか、そしてこれからどのようなまちをめざしていくのかについてお話を聞き、今後私たちが復興の担い手になる時の教訓を学びます。

関西大学 社会安全学部 奥村研究室

阪神・淡路大震災では、建物の耐震化や家具転倒防止、火災対策や災害関連死対策など、多岐に及ぶ防災の取り組みの重要性が広く社会に認知されました。私たちは、それらの取り組みの普及速度や普及率に注目して、当時の教訓は生かされているのかを検証しています。

パネルディスカッションテーマ：

「これからの『報せる』は？」

「報せる」には一方通行のイメージがあるが、現在「双方向」「つながる」という観点も重要となっている。その方法論にとどまらず、モノの持つ力といった多様な視点から未災者が未災者に「報せる」ことのこれから、について考えよう。

お問い合わせ：阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター事業部普及課　Tel：078-262-5066　Fax：078-262-5082

災害メモリアルアクションKOBE企画委員会名簿

※2023年７月１日現在

役　職	氏　名	所　属
委員長	牧　紀男	京都大学 防災研究所 社会防災研究部 人と防災未来センター上級研究員
委員	伊藤亜都子	神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科
	浦川　豪	兵庫県立大学大学院 減災復興政策研究科
	卜部　兼慎	ＮＰＯ法人防災デザイン研究会 株式会社ＧＫ京都 第１デザイン部
	太田　敏一	防災リテラシー研究所
	大塚　毅彦	国立明石工業高等専門学校
	大山　武人	ＮＨＫ大阪放送局
	奥村与志弘	関西大学 社会安全学部
	小渕　文恵	滋賀県立彦根東高等学校
	鈴木あかね	兵庫県立舞子高等学校
	高橋　徹	ＮＰＯ法人 TEAM・あげあげ
	中野　元太	京都大学 防災研究所
	西口　正史	ラジオ関西 編成営業局
	福岡　龍史	株式会社エフエム・プランニング
	福田　秀志	兵庫県立尼崎小田高等学校
	本塚　智貴	国立明石工業高等専門学校
	安富　信	神戸学院大学 現代社会学部
	横山　愛子	株式会社ＧＫ京都　第１デザイン部

サポーター	甲斐聡一朗	兵庫県災害医療センター
	越山　健治	関西大学 社会安全学部、人と防災未来センター上級研究員
	近藤　誠司	関西大学 社会安全学部
	諏訪　清二	防災学習アドバイザー・コラボレーター
	松元　正博	ＮＰＯ法人 人・家・街 安全支援機構
	宮本　匠	大阪大学大学院 人間科学研究科
	矢守　克也	京都大学 防災研究所
	高森　順子	情報科学芸術大学院大学、阪神大震災を記録しつづける会

顧問	河田　惠昭	人と防災未来センター長、関西大学社会安全学部特別任命教授
	土岐　憲三	立命館大学衣笠総合研究機構 歴史都市防災研究所（特別研究フェロー）
	林　春男	京都大学名誉教授
事務局	森田　克彦	人と防災未来センター副センター長
	筆保　慶一	事業部長
	行司　高博	研究部長
	波々伯部仁	普及課長
	足立　耕三	事業部普及課課長補佐（事務主担当）
	塩津　達哉	研究部研究調査員（研究員主担当）

災害メモリアルアクション KOBE2024 参加学生名簿

※順不同

グループ名	氏　名	所　　属
兵庫県立舞子高等学校	義村理央菜	兵庫県立舞子高等学校 環境防災科
	勝部　太智	兵庫県立舞子高等学校 環境防災科
	細谷　悠彬	兵庫県立舞子高等学校 環境防災科
	浅井　颯人	兵庫県立舞子高等学校 環境防災科
	田村　洸太	兵庫県立舞子高等学校 環境防災科
滋賀県立彦根東高等学校	伊東　大舞	滋賀県立彦根東高等学校 新聞部
	木村　胡春	滋賀県立彦根東高等学校 新聞部
	田島　　桂	滋賀県立彦根東高等学校 新聞部
	北川　空虎	滋賀県立彦根東高等学校 新聞部
	三﨑　和駿	滋賀県立彦根東高等学校 新聞部
兵庫県立尼崎小田高等学校	関　　彩華	兵庫県立尼崎小田高等学校 看護医療・健康類型
	辻田　瑚心	兵庫県立尼崎小田高等学校 看護医療・健康類型
	花内綺梨花	兵庫県立尼崎小田高等学校 看護医療・健康類型
	藤井　千聖	兵庫県立尼崎小田高等学校 看護医療・健康類型
	正木　結菜	兵庫県立尼崎小田高等学校 看護医療・健康類型
	山口　和心	兵庫県立尼崎小田高等学校 看護医療・健康類型
TEAM-3A	松岡　友菜	兵庫県立明石南高等学校
	里永　竜羽	兵庫県立明石南高等学校
	堀　　一葉	大阪プログラミング＆会計専門学校
	山本　魁星	兵庫県立明石南高等学校
	浜田　寿来	兵庫県立明石南高等学校
	玉田　春翔	兵庫県立明石南高等学校
	松岡　美羽	明石市立魚住中学校
	平川　　凌	兵庫県立明石清水高校
国立明石工業高等専門学校 D-PRO135°（明石高専防災団）開発チーム	西田美野里	国立明石工業高等専門学校
	藤田　純帆	国立明石工業高等専門学校
	久保田千晴	国立明石工業高等専門学校
国立明石工業高等専門学校 D-PRO135°（明石高専防災団）地域連携チーム	中前　　稔	国立明石工業高等専門学校
	斉藤　美音	国立明石工業高等専門学校
	西浦　航生	国立明石工業高等専門学校
	藤田　　裕	国立明石工業高等専門学校
神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ	岩下　　蓮	神戸学院大学 社会防災学科 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ
	在里　駿佑	神戸学院大学 社会防災学科 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ
	堀川　智哉	神戸学院大学 社会防災学科 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ
	小谷由依華	神戸学院大学 社会防災学科 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ
	河木　　剛	神戸学院大学 社会防災学科 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ
	山本　尚永	神戸学院大学 社会防災学科 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ
	森山　　怜	神戸学院大学 社会防災学科 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ
	服部　仁美	神戸学院大学 社会防災学科 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ
神戸学院大学 クローズアップ社会研究会	為乗　湧司	神戸学院大学 クローズアップ社会研究会
	加賀山　潤	神戸学院大学 クローズアップ社会研究会
	西山　　潤	神戸学院大学 クローズアップ社会研究会
	藤原　勝利	神戸学院大学 クローズアップ社会研究会
	名越健一郎	神戸学院大学 クローズアップ社会研究会
	小林　春奈	神戸学院大学 クローズアップ社会研究会
	國松　万熙	神戸学院大学 クローズアップ社会研究会
	稲澤　遥樹	神戸学院大学 クローズアップ社会研究会
関西大学 社会安全学部 奥村研究室	藤嶋　幸一	関西大学 社会安全学部 奥村研究室
	久世真侑子	関西大学 社会安全学部 奥村研究室
兵庫県立大学 防災リーダー教育プログラムチーム	前田　拓海	兵庫県立大学 防災リーダー教育プログラム
	長澤　春香	兵庫県立大学 防災リーダー教育プログラム
	石阪　未梨	兵庫県立大学 防災リーダー教育プログラム
	生子　達矢	兵庫県立大学 防災リーダー教育プログラム
	西岡　ゆき	兵庫県立大学 防災リーダー教育プログラム
	松林　勇希	兵庫県立大学 防災リーダー教育プログラム
	久保　彩華	兵庫県立大学 防災リーダー教育プログラム
	佐藤俊太朗	兵庫県立大学 防災リーダー教育プログラム
	永井結季子	兵庫県立大学 防災リーダー教育プログラム
	三宅　結香	兵庫県立大学 防災リーダー教育プログラム
	小板橋　花	兵庫県立大学 防災リーダー教育プログラム
	真鍋　沙織	兵庫県立大学 防災リーダー教育プログラム
	辻村　航平	兵庫県立大学 防災リーダー教育プログラム
	鐘森　悠里	兵庫県立大学 防災リーダー教育プログラム
	福井　彩薫	兵庫県立大学 防災リーダー教育プログラム
	吉田みなみ	兵庫県立大学 防災リーダー教育プログラム

発表風景等

キックオフ会（ワークショップ）　2023年９月２日

中間発表会（ワークショップ）　2023年11月４日

災害メモリアルアクションKOBE
ACTION

令和5年度 災害メモリアルアクションKOBE 報告書

主　　催：阪神･淡路大震災記念 人と防災未来センター
　　京都大学防災研究所
企　　画：災害メモリアルアクションKOBE企画委員会

人と防災未来センター 事業部普及課内
災害メモリアルアクションKOBE企画委員会
〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通1丁目5-2 西館6階
Tel：078-262-5066　Fax：078-262-5082
https://www.dri.ne.jp/pickup/memorial-action/

本研究は京都大学防災研究所共同研究（令和5年度一般研究集会2023WS-04）研究代表者名:（公財）ひょうご震災記念21世紀研究機構人と防災未来センター長　河田惠昭、京都大学防災研究所自然災害研究協議会近畿地区部会の共催によるものです。